

今朝ハはや嵐の音もかはるなりあはれ秋すまの浦なみ
何となく桐の一葉ハ落にけり實ニ昨日今日秋立らしも
天の川渡りおほせて織姫ハ今宵いかなる夢かみるらん
秋風ハ雲井をかけてすさへともなひかぬものハ萩の花妻
吹儘にやかておのれも枯ぬへし余りみにしむ萩の上風
月艸の花摺衣我やきん移りゆく世をなけく余りに
秋風をまねき盡してよはたらむ結ふ尾花か袖の夕露
朝またき露ちる小野々秋風につらぬきとめぬ玉の緒すゝき
うしといひ嬉しと聞し秋風も今ハ野山に吹盡しけり
花妻と名によふ萩ハにしきせりおのか操をたてぬきにして
結添し竹ハ亂れて中垣に菊のみたてる庭の秋風
立田山にしきをつゝむ薄絹ハ紅葉に置く今朝の初しも
月艸の花を見るにも歎かな只とにかくに移りゆく世を

朝かゝみ取る手もよそにみつるかな移る習の月艸の花
誰か爲そ思ひ消なて鴈かねハうき中そらに文字をかくらん
山彦に我擣音の響くかと思ふハよそのきぬたなりけり
秋立て夜寒の嵐ふか夜の脱カも鹿の音聞かぬ曉そなき
須まの浦や松を秋風ふくる夜に浪も夜も打増りつゝ
さひしさハなみたにかこちふる雨の雫ひまなき秋の夕暮
物思ふ夜はの枕の秋風になみたそゝかぬ曉そなき
うつらふな庭のしらくく代々をへて我もとゆひに霜ハ置とも
我宿の菊ハうつらふ庭の面に又咲出る霜の初はな
白菊の花のかさしを元結に霜の置と脱カや人ハみるらむ
久かたの天の川なみよると見ん雲井の庭のしら菊のはな
立こめてそことも分ぬ夕霧に籬の菊の露重るなり
久かたの天の川なみ

元結に霜や置らんしら菊のかさしを移す今朝のさかつき
露霜の結ひ争ふ中垣に亂れて匂ふ白きくのはな
咲きくの花を秋風吹からに音へなくしてよする白なみ
白なみのよすとや人のとかむらん手折盡せるませの村さく
打よせて歸らぬなみハ白菊の匂ふまかきかしまにそ有ける
島の名の籬に咲る白菊ハ寄せて歸らぬなみかとそ見る
秋ことに見るそ嬉しき咲きくの花も我みもかはるいろなく
年ことにかさして遊ぶ白菊ハいつの世かけし契りなるらむ
朝露にぬれながら立白鷺のそれかあらぬかそのゝむらさく
結そへし竹の籬のふしことに千代をこめたるしらさくのはな
和田海のかさしの玉とみゆるゑなみたつ菊に置くしらつゆ
手すさひに植し籬の白菊ハ今や咲らむ故郷にして
立まとふ籬の菊の霜の上を有明の月の上にみるかな

風騒く籬のきくハ白妙の妹かたもとをふるかと思ふ
菊の上に夜寒の嵐音さえて籬の露の置ハかつちる
菊の上に置そふ露のしら玉をこほさぬ程の秋風もかな
菊の上に置そふ露の玉ながら折てかさゝむ袖ハぬるとも
霜結ふ御垣の菊ハ白妙のいもかたもとをふるかとそ見る
ふりさけてみねの紅葉のいろ添ふや誰か織初し錦なる覽
久かたの照日や影を分つらん片枝いろこき庭のもみち葉
打なひく岸のもみちのかけ見えて水の底にも秋かせそふく
山川のきしの紅葉に風越ていろかはりゆく水のしらなみ
紅葉々に照そふ月ハ山姫の錦の袖にかけし玉かも
明日またハちりもやせんと村しくれふりはえて織る山のもみち葉
常盤なるものそと見しを紅葉々のちりかゝりつゝ松を染けり
久かたの月の光りもさやかにて紅葉ちりそふ木かくれのやと

よそにのみみねの紅葉のいろ添ふや夜るの錦の比ひなるへき
紅葉せぬ艸こそなけれ立田山梢を拂ふ今朝のあらしに
かけ移る岸の紅葉に風あれて梢を洗ふ水のしらなみ
枝なから見るへき物を袖かけて折ハかつちる山のもみち葉
紅葉ちるにしきの上にとりして今日山姫に別れ告たる
もみちちる立田の川にすむ魚ハ秋のにしきの織繪とそ見る
紅葉ちる桂の川の筏師ハつゝりの上に錦をそきる
置あえぬ露の情の浅けれハまたいろならぬ山のもみちは
奥山の岩かきもみちまれにたに見る人なしにちりぬへしなり
露霜のいかに置はは松をさへ染て匂へる蕙のもみちは
つたかつらかゝる山路にまとひ来て猶奥深き紅葉をそみる
たか爲の手向の神ハ請ぬらん紅葉ちりそふあけの玉垣
照そひていろこきものハ夕日影高尾のみねの紅葉へけり

立交る松のけむりの中に又もえていろ添ふ山のもみち葉
朝風に晴行きりの絶間よりほのくみゆるみねの紅葉々
いつとなくもゆるもみちの中にまた烟立そふ小野々炭かま
大井川なみの綾さへ立そひて錦をちらす山おろしの風
紅葉々の妙なるいろも有るものを雪ハ野山を薄粧ひして
すゑ終にかれか物とやなりぬへき風よりさきの山のもみち葉
さゝなみや滋賀の都ハ霧こめて秋風たかし大比叡の山
すまの浦や松を秋風吹かぬ夜ハなみこそなけれ衣打なり
露深き艸の庵の夜るの雨に賤か小衣打しめりつゝ
月の影出入山の秋霧を羽風に拂ふ天津鴈かね
とふ人も嵐の庭の露の秋月見る外のなくさめそなき
夜もすから擣衣の音の聞ゆるや寐覺の里に打ハなるらん
三日の原夕をかけてかる艸のとかまハ月の光りなりけり

有明の月の光りも空に消て霧に音する宇治の川浪
世を捨てのかれ入たに有ものを月ハ山より出てこそくれ
夕暮ハたとくしとて月影の光れハくたる秋の山みち
旅衣すそ野々露の深き夜にたもとかたしき月を見るかな
秋ハ尙所やめて、久かたの月も明しの浦にすむらむ
月ハ猶玉より清くすみのえやなこの浦邊によする白浪
淋しさハむくらか宿の秋の月人こそとはねむしの聲々
秋風の音も静けき軒はよりも月影も小夜更ニけり
さひしさを同じ心に堪かねてむくらの宿そ月にとはる、
分て行千草か花のいろく露さへ宿る秋のよの月
稀にのみ夜はの擽衣の音つれて月静かなる嵯峨の山かけ
月すめハ思ふかきりの詠めよりうきハよそなる山かけの里
人とめぬ宿ハ尾花に埋れて月静かなる山かけのさと

吉野山ふもとの里ハきりこめて風より晴る、みねの月影
吹おろすみねの秋風小夜更て霧の上ゆくありあけの月
かくれてハ又あらはる、久かたの雲間またらの月のさやけさ
大そらハ廣きかきりもなきものをいかて月影雲間行らむ
置露の玉の光りに影見えて月もはてなき武さし野々原
見渡せハ行衛も知らすはてもなく月こそすめれ武さしの、原
我里をくもらす霧の上を又照らす雲井の月ハ有けり
霧こめて曇りなからに照月の空ハさやかに秋風そふく
さ、なみや滋賀の浦風末みせて晴る、雲間の月のさやけさ
あふみ路や瀬多の長はし長き世のためしをこ、に月ハすむ覽
礎に昔を見せてあはれなり世を古寺の秋のよの月
月影に消行星ハあかねさす朝日にあへる露かとそ見る
やかて又月の宿りとなりぬへし人ハかくす袖のなみたも

故郷の古き軒はに宿りけりしのふに余る露の月影
なかれてハ歸らぬ水にかけ見えて今宵も更る秋夜月
見渡せハ行衛も知らずはても又浪路はるかにすめる月かな
詠め遣る雲間の月の影も又秋ハことなる光りなりけり
明日ハ又秋のなかはもこゆるきのいその浪間の月のさやけさ
住の江の浦のそりはしさかしまに移れハかはる夕月のかけ
さひしさハ賤かつま木の音もなし深山の奥の秋のゆふくれ
さひしさを外山の霧に隔たれてかこつかたなき秋の夕暮
こぬ人をまつより外のいろもなし思ひつもりの秋の夕暮
咲はなにつらき心を紅葉々に深く染たる天津初鴈
忘れん物とも知らず秋風を寐屋の扇の何まねきけん
鹽みてハかつらか枝を枝折にてあしへの田鶴の鳴渡るらむ
かたをなみ月の出鹽の浦風や雲井にすめる鶴の諸聲

誰か越へて山路の露ハ拂ふらん尾花かもとの虫の聲々

冬の歌よみける中に

冬されハみねの椎柴しハらくも止まぬ嵐の音を寒けき
寒る夜の千鳥の聲にねさめして音に鳴ものハ我みなりけり
艸の家の軒もる月の寒けれハ寐すて聞ぬるあかつきのかね
神な月はつかの月も更にけり人の往來の絶るのみかは
霜むすふ草の庵の夜嵐にかた敷袖もこほるひとりね
よそに見て人や笑ハん寒けれハねられぬ儘の老のくりこと
散か上に猶ちりそへて紅葉々の錦をたゝむ枯木脱カのかせ
立田川うきてなかるゝ紅葉々のにしきをかつく浪のをし鳥
妹か手をとろしの池の薄氷いかにむすひて春を待らむ

久かたの天の川なみ氷るらし川原の霜を置まさきぬる
旅人の笠宿りするひもなし時雨のあめのあしのはやさ
北山のくもると見しか初しくれやかて都もふりにけるかな
我かちに人ハ騒きて双六のいちを争ひふるしくれかな
こよみたにもたぬ深山の山かつを驚かせてハふるしくれかな
吹風も南にかはる音す之晴るしくれの明かたのそら
残りなくちりゆく風のもみちはや又こん秋のいろを染らん
旅人の門たかへしてたしくかと思ふハ夜はのしくれなりけり
雪ならハ老たる駒も追へきに道こそ分ねちれる紅葉々
谷かけハちる紅葉々に道もなし木曾山おろしいかに吹らむ
間なくちり間なく流れて行水を紅葉と共に人や汲らむ
中々に音なし川となりにけり水は落葉の下をなかれて
紅葉々のちりも積りて山川の色こそかはれ水のしらなみ

立田山風のくれたる家つとハ袖にちりこむもみちなりけり
曉の老の寐覺のさひしきハ拂ハぬ庭に紅葉ちるころ
有明の月にちり行紅葉々ハつれなき物のかきりとそ思ふ
故郷ハいかにはかり思ひ遣る空もかきくらしゆくし脱カれかな
こゝろある人にとは、やくれ降鳴立澤の深きあはれを
夕しくれいかにめぐりて淋しさのかきりをすまの浦にみすらむ
もらさしとふりゆく雲の夕しくれゑそか千島の果も染らん
大内の山のやまかせ吹儘に處せきまでもみちゝるなり
紅葉々をよせてハ拂ふよせてハ拂ふ枯に道こそ分ね志賀の山越
大かたに後れて落る椎の實のそれかと聞ハあられけり
分れこし秋ハ昨日の山路さへいろかはりゆく神な月かな
神な月今日もしくれて山川のなみを染たる風のもみちは
すみ渡る月に紅葉の錦さへ重て匂ふかけそくまなき

人音ハ雪に静まる深き夜に加茂川千鳥鳴渡るなり
小夜更て天の川にや通ふらむ雲井はるかに千鳥鳴之
野も山もひとつに積る雪を又ふたいつかにしたる加茂の川水
降添へて雪も友まつ深き夜に雲間の月の影さゆる之
降行ハしくればかりと見し程に雪こそ積れみねの松原
静けさハまたきにくいのおともなし雲井の庭の雪のあけほの
雪深み小野々炭かま道絶てけむりより外のほらさりけり
數へこしうき年月の夫にさへ別るゝまでも暮にけるかな
あしろ木の日をへて寒し衣手の棚上川にふれるしらゆき
立向ひはなつ矢玉もかくはかり我のる駒を打あられかな
いそくとて我のる駒のくらつほに霰た走るあふ坂の山
今朝も又寒さに酒やあたゝめん紅葉ちりそふ庭の霜かれ
かくれ家の軒の山かせ袖ひちて結ひし水も氷るころかな

山里ハ落葉に道もなかりけり紅葉の後ハ人しとハねは
さかの山日を積む雪に埋れて嵐の宿る松か枝もなし
いそくとて誰れかハ越んふる雪に横をりふせる小夜の中山
年なみのよる瀬に深く歎かなはるをはるとも思ひはてなて
ふみ分て見し其折のいろもなし霜に移らふ野邊の撫子
吹止めハ野山の霜となりにけり實に寒かりし木枯のかせ
吉野山みねのこからし吹儘に木の間の月そもり増りけり
霜分て都に出るあき人の氷魚よと呼ぶ聲も寒けし
うなる子か真袖にとめし玉霰その嬉しさの數も見えけり
珍らしと今朝しも見しをはしめにていかにふる夜の霰なるらん
淺からぬ水のこゝろを操にて今年もなるし池のをし鳥
延火たくあたりの霜も打とけて神や聞らむ夜神樂の聲
ふみ分て見し其折のいろもなしあしたの草の雪のあけほの

雪深きたかねの松の夜嵐にひとりすみたる冬の夜の月
降雪の下にうもれていろもなしつまんと思ふ澤の根せりハ
紅葉々もともに氷りてくゞり來る谷間の水の音もやみにき
いつとなく音さへ絶て薄氷夜毎に結ふ瀧のしらいと
ひたとひハ日かけにとけし雪をまたつらゞにしたる軒の糸水
寒けさハ笥吹拂川風にあかつき近く千鳥なくなり
水さへもかるゝ川邊のあしのはに夕風騒き千鳥なく之
くまもなく月すむ空の友ち鳥桂か枝の霜に鳴らむ
玉あられ楨のはたゞく音更て寐覺の里に千鳥鳴之
百千舟入江の松ハ埋れて雪をくもてにもやひとる之
紅葉の匂へる妹かたもとさへふりていはそにむらしくれかな
薄絹の上著とやみん紅葉々の錦の袖に置く初しも
鳴むしよ花よといひて分て見し跡ハかれ野々霜の通路

賤か家の前の棚はしふみ分て誰か通ひけん霜の消々
久かたの月の氷となる儘に天のうきはし霜や置らむ
すむ月のさゆるを見れハ久かたの天の川原も霜や置らむ
來んはるを隣になして柴の戸ハしはゞ物もいそかさりけり
つれもなく暮としのなくさめに聞とやこゝに鶯のなく
御築地の内ハ春めく粧ひに猶いそかるゝ年の暮かな
神な月紅葉ちりしく袖の上にしくれふる日ハいとゝわひしき

國事のことによりて西國に下りける時また其外旅の歌ともよめる中

二

旅衣立重ねけり九重の都を雪のふるさとして
ことさらに花を咲せる雪に又袖ふりゆくもをかしかりける面白きかな

冬さへもいと、伏艸白妙に野にも山にも雪ハ降つ、
黒染の名さへうもれて時ならぬはなも匂へる雪のしろ妙、
河風に夜はの千鳥の音つれて伏水の夢をさましつるかな
かりてほす浪花のあしの東手緒も切る、はかりに霰打之
浪花脱カかた芦のかりふき風寒て霰ふる夜も旅ねしてしか
風寒る入江の芦間こき分て行や小舟の跡のさゝなみ
寒けさハ管吹拂ふ川風に曉ちかくちとりなくなり
勝間田のとゝろか池をかゝみにて誰か姿みの橋ハ掛けん
なき清水なき名々たてそ勝又のとゝろか池の水のしら浪
かつ又の池の上なるなき清水いかに別れて末ハあふらむ
雪降ハ久米の皿山さらに又面かはりせり久米の皿山
つみ綿ニのせてを見たる玉しまや雪にみかける冬の夜月
かり寐して艸の枕に美作やささらに今宵の月そくまなき

雨ふれハ細谷川に水まして白浪たかし吉備の中山
古への名残も見えて憐之須まの浦家の軒のたれすに
浪華かたあしくなとりそ國の爲身を盡したる深きこゝろを
吹風に秋の氣色ハ見ゆれともまた浦の名の阿月ころかな
ふりさけて見れと及ハすにけり雪を日を積むかつらきの山
冬されハ寒ハいと、正木ちるかつらき山のみねのしら雪
秋風の吹初しより鹿の音を軒はに聞ぬ曉そなき
荒鹿のあらし心に堪かねて折々さけふ聲そかなしき
天の下に名もかくれなき宮しまの鳥居の笠木としふりニけり
雲霧の猶包めはや世の中をよそに三國の山といふらむ
黒澤や分なき道を分暮て旅ハうきてふかきりをそしる
此山中に山猫すみて人をとれ喰ふといへり又水蛭樹の枝にすめり人
の足音を聞て上より落又山にわくひるハ足よりのほるこ

夜るくハ人を喰てふ山猫のひるさへ多き山路なりけり
名もたかき駒なき山にこまハあれとかち路のみねハかちにてそゆく
まつならハ琴の音をたに聞へきに榎木立山のこからしの風
月か瀬や千もとの梅を鶯の初音なからに移してしかな
琴彈の松をはるかせ吹ぬ日ハ霞のみこそ柵引にけれ
荒磯のなみの響のたか^{か脱カ}れハいつこにゐてもよるハきこゆる
集めてハうみともなりぬ五百重山木のはの雫谷の下みつ

戀の歌とてよめる

誰もみなまよふと知りてまよへるや戀といふものゝ習ひなるらむ
たのめつゝ來ぬハ我みのとかならし今宵も待て心くらへん
待わひて今ハ待たしと思ふさへ幾夜になりぬ人のつらさと
片糸のむすほふれても見えなくにあふ夜も知らに月日へにけり
いのりても受ぬを神の誠そと思ひ知りぬる人のいつはり

有明のつれなき影そ宿りけるうき別路の袖のなみたに
夢ならて逢夜ハあらし起ふしに思ふこゝろも現ならねハ
春の海ひろふあわひのかひなきハともに思ハぬ契りなりけり
かき遣りし文字のせきやハ絶ぬともふみたに通へあとの印に
はてハ又よそにやみると行末のこゝろにかゝるみねのしら雲
くろかねのきつなにつなく獸のはなれかたくも思ほゆるかな
いかにせん駒もすすめす駕人も夏野々艸の茂き思ひを
朝夕にとるとハすれとますかゝみ心をひとに移すころかな
戀しさを増みのかゝみともすれハ人の心のくもりもそする
いかにせん駒もすすめす駕人も夏野々草の茂き思ひを

詠草井幽囚記

慷慨歌集

軍曹源信善上

文久二戌年九月十一日祭主藤波家奉幣使として 伊勢神宮へ發遣此
日於禁中御神事此日高松三位保實卿御供ニ而はしめて日御門より入
りて南門の内承明門の前を行けるに艸深くして御袍の御袖に露のち
りけるを見て

淺ましや雲井の庭の艸の露かゝらぬみにも袖ハぬれけり
山里の賤かふせ家の内たにもかくまで艸のたねハ生しを
大内の山の下艸ひく人もなくてふりそふわかなみたかな

元治元甲子年六月頃より長州の兵士去年八月十八日の事に依りて禁
中へ歎願のこと有りて洛外伏水嵯峨山崎所々に屯集同七月始メ兵士
の形勢を見んとて嵯峨の鳳林寺といへるに詣て、

隔てこし世のうき雲を攘はすハ嵐の山もかひやかならむ
秋風の通ふ嵯峨野々幡萩なみたつまでもなりにけるかな
人ことのさか野々奥を來て見れハ所せきまで匂ふ秋萩

同十七日有柄宮御親子を始奉り長州の事件に依種々御諫奏あらせられ其外大炊御門右大將家信公中山大納言忠能卿を始として六十八人の公卿殿上人等連署建言御諫奏有と雖も終に用事なく是上に中川宮等の奸徒妨くるか故へ同十八日夜半過る頃御つめ空敷ひらけて御殿に歸りて西四辻公業朝臣と共に物見の高殿に登りてはるかに嵯峨山崎のかたを見遣りて

かゝり火の光りもくらく更る夜にあな思束な八はた山崎

いまた夜も明さるにはるかに炮の音響きけれハ

かはるよと見えし雲井の氣しきよりやかて玉ちる萩の下風

同しく十九日いまた夜も明はなれさるに炮の音間近く聞へて禁門の

騒ハもとより町々の騒動大かたならず

冬ならハ霰とやみん玉走る中立賣の明かたのそら

乱るへき世の糸口となりにけり萩のにしきハ折もはてなて

生死の堺を今日と軍ひて御築地内の軍はけしも

同日未の刻頃なるへし禁中御常の御所當りも軍卒みちくへて既に内侍所も御動座にて 主上も御動座あらせらるへき御氣しきにて一橋中納言ハ甲冑にて御所中を往來し其外會津桑名を始め階下ニ腰打掛今にやとまつ御庭にハ御鳳輦御板輿をかき居へたるを見るにも目も暮心も消るはかり悲しくて涙とゝめかたし殊に此騒に乗して御鳳輦を彦根の城に向け奉るの聞へ有るか故にことにはむねいたみぬ然るに諸卒の中にも會津の兵士御所中にみちくへて或ハ樹下にふし又ハ水邊に足をひたし或ハ甲笠を枕とし刀鎗を提専ら暴威を逞ふするハ傍に人なきか如し彼もろこし宋明の世に外夷共か彼王の都にせまり

しも斯や有けんと思へはなみた止めかたし
夷らか襲ひ集る心ちしてあないまハしの今日のけしきや
然るに彼奸物とも頻りに御動座をうなかし奉るといへとも終にその
こともとゝまらせ給ふと聞て
動きなきものとも知らて大内の山もりいたく騒きつるかな
天地もとゝろくはかり騒けともゆるかぬものハ大内のやま
去る程に軍同時に起りて炮の音天地にひゝき川裂山崩るゝか如し
大路行車のきしる音にさへ驚くはかりなりにけるかな
火ハいよゝ盛んにして禁中も既にあやふく見えて市中ハ唯一圓の
猛火となり男女東西になきまとひ軍卒南北に走る
焼すてゝ艸も残さぬ九重に人の歎きの茂りそふかな
火のことく犯しかすめて九重を焼野になしし武士ハたそ
授長門の兵士所々に乱て今日を限りと戦ふ有様ハ萩の盛りに野分の

吹起りて露はなのちるか如し

秋萩の花すり衣誰もきん大和にしきのこゝろこそすれ
あはれとハたれか見さらむ秋風に乱れてなひく萩の下露
秋風ハさも吹はなけ乱るとも又や結はんはきの下露

防長の有志所々に乱れて戦死す

猛きそのみのあやまちに破りけんまた織はてぬ萩の錦ハ
折そめし萩のにしきハ故郷にきても歸らすなりにけるかな
思ひ遣りて言はの花の露を今日手向てこゝにとふ人そわれ
夜ハ主と共に禁中に明して

かれを思ひこれを歎きて明かぬる夜はの涙の玉敷の庭

大空ハ火にこかりて月の光り紅の玉のことし

焼立るそらの光りに久かたの月の光りもいろかはりぬる

市中ハ一時に焦土となりて男女ちまたニなく

九重の町ハ焼野となりにけり人の歎の茂りのみして
日ニ添ひて人の歎の茂るかな艸も残さず焼し都ハ
礎に昨日を見せて今日ハ又瓦のことく碎てそゆく

軍卒家ニ入て財を盗み金をとりて其跡に火をさして焼くその暴悪譬
ふるに物なし

吾袖ハかはきもあへす白浪のかゝりける世を打歎つゝ

猶その焼たる跡にぬす人來りて残りの財をとらんとす

世の中をうみのうねりのあまりとやよるく越る沖津しらなみ

其頃有志之建言に會侯之暴悪木曾義仲北條時政ニも越ると書るを見

て

音に聞木曾山風も民艸の枝折るゝまでハ吹かて絶にし

音に聞きそ山風の烈敷も民艸までハからささりけり

時まさに越て烈敷秋風ハ枝折るゝ萩の下葉にそしる

同しとしの秋思ふこゝろありてよめる

あるハとひ又ハかくれて光りなき星の林に月ハすむらむ

久かたの月ハさやかに照せとも星ハ光りもなきよなりけり

出る息入る息ことの荒ましも世を歎くより外なかりけり

はり詰し大和心を梓弓たゝ一筋に思ひいるかな

同年霜月十八日長州追討の軍はしめと聞て

罪なきを討たにあるを今日といふけふをはしめに軍せんとや

かけまくも今日新嘗の祭りとも吾妻男ハ知らすかも有らん

鳴神の音さへ間なくふる雨に豊の明りハ名のみなりけり

元治二年丑七月十九日幽囚中によめる

此秋ハいかに咲らむ去年の今日野分にあひし萩か花妻

甲子四五月の頃より冬に至りて常野兩州の騒北越の事件に移り都ま

ても騒かしかりしに武田田丸の人々加州の軍門ニ降りこハ水戸一

橋の両卿敕命ニ違背して攘夷せざるを憤りて起れる處終に加州の手
より幕府之諸吏ニ渡して天下の義士を非命に死せしむ

武士のかゝみとやみんみな川の川なかれて清きみつのみなかみ
吹拂ふ筑波おろしの烈敷にいよ／＼清し水のしらなみ
筑波山峯の嵐の烈敷にもろくもちるハこのはなりけり
やかて又木のはのことくちりぬへし筑波おろしハ烈しかりけり
水といへは浪ハ立ぬる習そとよそに汲ても知らるへきかな

有志の人々非命に死せるをいたみて

さしもやとたのみつるかのかひもなくいか／＼かはりし人のこゝろそ
よしや人東風吹かせハ荒くともいかて返しのなくて止むへき

武田々丸といへることを物の名にして

たけかたき梢の雪もち風の荒く吹にハたまるものかは
人心かはりつるかの浦みても今ハかひなき世をいかにせん

元治二乙丑年三月廿三日高松左兵衛權佐實村朝臣石清水八幡宮臨時

祭の舞人にて下向有此時御供にて下向

宮人のともしつれたる松の火に匂ふ八幡の山さくらはな

久かたの月もすみつゝ咲はなに匂ひ添たる糸竹の聲

花傘の作りはなを手折て人に遣すとて

そのかみも思ひ出られつ八幡山御幸なりにし花の面影

徳川家康將軍の貳百五十回の神忌とて宮方堂上諸官人等日光ニ下向

之時高松實むら朝臣の御供にてともに下りける時よめる歌

都出て艸津の里の艸枕かり初ふしの夢を姫かき

かり初にむすふも嬉し艸枕草津のさとのはるのあけほの

見返せハ都ハ遠くなりニけりはるも今ハの入逢のかね

はる深くちりそふ花を雪と見て袖ふりゆくも面白きかな

ともすれかうしともいひし都さへ旅にしゆけハいと戀しき

卯月朔日近江路にかゝりて

今日ハはや春の名残も盡はて、旅人急く入あひのかね
人ハみな夏の姿となりにけり春ハ昨日の入あひのかね
移りゆく鏡の山もくもれかし旅のやつれの見えもこそすれ
すゑハまたたのむかけともなりぬへし夏にかけたる藤なみの花
故郷を遠く詠めし山を又跡になしてもすゑそはるけさ
九重の都ハいつら思東なこゝろあてなる山もかくれて
木々ハみな若葉のいろに春暮て老そのもりハ夢も結はず
深山邊ハ桑の若葉もまたしきに朝風冷し夏ハ來ニけり
はるすきて夏の日數ハつもれともまた風寒し木曾の谷かけ
ふりさけて御嶽のみなねの白雪ハ去年より残る雪にそ有ける
都にて誰かハそれと詠むらむこゝに木曾路の峯の白雲

甲子の冬水戸の武田此所を渡りしと聞て

大田川みなさる水の沫の上に消にし人の面影そたつ

上ヶ松の驛此所に浦島子の故跡とて有

浦島か深き契りも夢なれや寐覺のあとを見るに付ても
浦島か昔かたりとなりニけり寐覺の床の深き契りも
山川の深き契りも夢なりとみを浦島か寐覺しつ。覽
都にて名残なりける花を又木曾の山路の奥にみるかな
奥山の木々の下露谷の水なかれくゝて木曾の大川
唐人の焼し山路もよそならし木曾の谷まにもゆるつゝしハ
今ハはやみとりのいろに染かへよ夏にかけたる瀧のしらいと
高根より繰て落せる糸水に小野々瀧津瀬人もこそよれ
駒か嶽山より山にかつ見えて高ねの雪ハ夏もふりけり
夏衣木曾路を行ハ雪ふりて面白けなる駒か嶽かな
不二のねハ雲井のよそにかつはれて松風たかし鹽尻の山

見んと思ふ不二ハ雲井にかつ消て夕風清し諏方の海面
みんと思ふ不二ハくもりて鹽尻の山路ハたかし日ハかたふきぬ
言のはハ及ひもつかし久かたの天よりなれる雪の不二の根
都にハ花の名残も夏衣木曾路ハ今そさかりなりける
桃さくら匂ふを見れハはる／＼と越て木曾路の山をかひある
煙立淺間か嶽の淺ましやいつまでもゆる思ひなるらむ
世の中ハかくこそ有けれ思束なさぬ寐覺の朝よりして
深田なす笛吹の山のぬかり道いかにわひしき限りなるらむ
雨そ／＼く笛吹のみねのぬかり道たとり／＼て小夜更ニけり
大平山といへるに水戸浪士屯集せし事を思ひ出て
屯しハ人ハ昨日を昔にて青葉にこもる大ひらの山
大平の山のふもとを我ゆけハ雲井はるかに筑波山見ゆ
日光山に著して

山高みむすふ氷も白雪も夏さへとけぬ黒かみの山
百敷や古るき軒はそ歎かる、二荒の宮を見るに付つ、
二荒山ふたゝひ宮ハ動かしと立し柱もたのみすくなき
二荒山宮を思へハ天皇の居まし所ハ小屋のわらふき
大君のことハ思ハて二荒山ふたつともなき大宮はしら
祭こともかひやなからむそのかみの掬も水のあはれ世の中
百敷や古き軒はの歎かれて二荒の宮ハふためとも見す

中禪山の瀧を見て

唐人の長さしらかにくらふれハまた黒髪の山の瀧つ瀬
黒髪の山の瀧つ瀬年を経て白き筋にそなり増りける
年をへてたれか織らん山水のわくよりなれる瀧の白いと
深山路や雲ふみ分る夕暮に聞とも分あかす鶯の聲
物としてかゝれとそ思ふ高根より落ても絶ぬ龍の糸水

山うはかその白かみをふり乱しあらふとみゆる瀧の糸水
初聲を聞ハ戀しもほとゝきす都のそらもかくや鳴らむ

實むら朝臣に杖を切りて參らせけるにつき給ハさりけれハ
ことさらに君か爲にと切る杖を捨るハをしし突ハ物うし
わひしさをたれにかとかん村雨のふり乱りたる黒髪の山

江戸に出て後よめる

今ハはや枝もろともに打攘へ大樹のかけもたのみすくなし
武さしのゝはらハぬ袖の露霜に消かへりても世を歎くかな
猛かりしその鎌倉のいにしにときかへしても夷討たハや
風吹ハ沖つしらなみたちまちに打攘ハなんしこの夷を
競へこし武藏さかみの強き名を昔にかへせ物部のみち
夷らか振舞みれハ武藏野々はらわたをたつ心ちこそすれ
不二を見てよめる

かくて世にふるぬるものハ不二の雪の夏をよそなる姿なりけり
晴曇るたかねの雪をすかたにてしはくかはる不二の芝山
鏡なす田子の沼水清けれと不二の姿ハ今日も移らす
晴ゆけハ松風たかし清みかた三保の浦邊に移る不二の根

同じ年の冬國事のことにつきて西國に下り侍りける時よめる
旅衣立重ねけり九重の都を雪のふるさとしして
ことさらに花を咲せる雪に今朝袖ふりゆくも面白きかな

伏見にてよめる

冬さへもいと深艸白妙に野にも山にも雪ハ降つゝ
黒染の名さへ埋れてときならぬ花も匂へる雪の白妙

浪花に下りて

河風に夜はの千鳥の音つれてふしみの夢をさましつるかな

かりてほす浪花のあしの東手緒も切るゝはかりに霰降之
浪花かた声のかりふき風寒て霰ふる夜も旅ねしてしか
風寒る入江のあしまこき分て行や小舟の跡のさゝなみ
寒けさハ筈吹拂ふ川風に曉ちかくちとりなくなり

美作の國かつまたの池にて

勝又のとゝろか池をかゝみにてたか姿見の橋ハかけゝむ
水鳥のうき巢やいつら勝又のとゝろか池の水のしら浪
なき清水なきなゝたてそ勝又のとゝろか池の水の白浪
勝又の池の上なるなき清水いかに別れて末ハあふらむ

みさかの國にて

雪ふれハ久米のさら山さらに又面かハリせり久米のさら山
つみ綿にのせてをみたる玉しまや雪にみかける冬の夜の月
かり寐して艸の枕にみまさかやさらに今宵の月そくまなき

備前の國にて

雨降ハ細谷川に水まして白浪たかし吉備の中山

攝津國に歸りて

古への名残も見えてあはれえすまの浦屋の軒のたれすよ
浪花渦あしくなとりそ國の爲みを盡したる深きこゝろを

防州阿月の浦にてよめる

吹風に秋の氣色ハ見ゆれともまた浦の名のあつき日の影

大和國にて

ふりさけて見れと及はす之にけり雪に日を積かつらきの峯
夕されハ寒ハいとゝまさ木ちるかつらき山のみねの白雲

藝州巖島にて

秋風の吹初しより鹿の音を軒はに聞ぬ曉そなき
荒鹿のあらしき心に堪かねて折々さけふ聲そかなしき

天の下に名もかくれなき宮島の鳥居の笠木としふりにけり

豊後國三國峠といへるにて

雲霧の絶すたてはや世の中をよそに三國の山といふらむ

黒澤や分るき山を分暮て旅ハうきてふかきりをそしる

此山中ニ山猫すみて人をとれ喰ふといへり又水蛭樹の枝にゐて人の

足音を知りて上より落又山に居るひるハ足に付え

夜るハ人を喰ふてふ山猫のひるさへ多き山路なりけり

豊後より日向に越る時

名もたかき駒なき山にこまハあれとかち路のみねハかちにてそゆく

まつならハ琴の音をたに聞へきに真木立山の木枯のかせ

日向國にてよめる

井の宮の千もとの梅を鶯の初音なからに移してしかな

琴弾の松をはるかせ吹ぬ日ハ霞のみこそ棚引にけり

荒磯のなみの響のたかけれハいつこにゐても夜るハ聞ゆる

赤江川にて

集めてハ海かと思ふ五百重山木のはの雫谷のしたみつ

○ はるの歌よみける中に 詠艸六

浪花かた堀江の芦のめもはるになりにつらしなかつみたなひく
なにハはたかすむ入江の夕なみにあしかり小舟こきかへる見ゆ
冬深く残りし雪ハそれなからかすみにきゆる遠のやまもと
曉の老の寐覺の友もかなかすむ月夜を見つゝあかさむ
あたゝき谷ふところを心あてに花の乳房を尋ねてそゆく
咲残る枝も嵐の山さくらまた昨日今日ちりもはしめす
きゝすなく岡のかや原深けれと猶子を思ふみちハありけり
はる深く見し紫のいろを又夏かにけたる藤なみのはな

戀の歌よみける中に

何となく心に物ををかききハこれや戀てふはしめなるらむ
つれなさハ幾夜になりぬ一日たにみねハ三とせと思ふ習ひを

つれなさの余りにぬるゝたもとなたのめぬたにも待ハならひを
今にして思へはいとゞ淺かりき只あふまてのうらみなりしを
そらに立うき名もつらしふしの根の雲より上のけむりならねと
かそへこし曉ことのかねの音ハとしのかきりとなりけるかな
下り立て我汲今朝の若水に千歳のかけや先移るらむ
あら玉のとしの數添歎ひにへりゆくものハ命なりけり
たらちねにみそはにありし時たにもたよりすくなく思しけんかな
まれにたに花ハとはん人もなしふりにし宿の軒のたちはな
よめといふ名をはおふせて昨日今日よとのゝ若菜たれにつむらむ
八重ひとへ花も匂ひて九重やかすみのほらハかすみそめつゝ
咲ふめの花ゆへ月もかすむかと思ふはかりに匂ふそらかな
芳野山また夜深しとたとるまにたなひき渡るはなのよこ雪
大そらハ花にしらみて横雲のそれかとみしもさくらなりけり

よしや日ハくれなハくれねさくら花此夕はえをいかで見はてむ
 さくらはな物ハいはねと夕はえの氣色を見せて人をかへさぬ
 さくら花よその詠めとなるたにもねたしと思ふにましてちるとき
 いさこゝに今宵もねまし久かたの月も宿れるはなの下かけ
 残りなくさくらか枝につもれともまた打とけぬ花の白ゆき
 よしの山去年のしら雪ふみ分て入にし時のこそかつハ有けるちこそすれ
 咲花にあかぬハ人の真こゝろと知りてや月の照てみすらむ
 思ひねの夢のたとちにもちる花ハをしむこゝろのまとひなるらむ
 はる深く積れる雪はみよしの、芳野々山のさくらなりけり
 長閑なるはるの光りに猶もれて深谷の雪の猶残るらむ
 よとゝもに古川の邊の柳原名にこそたてれ若みとりなる
 思ひ遣る程ハ雲井の月影を袖に宿さぬ夜はもなきかな
 道絶て今ハ人めをはゝかりのせきあへぬものハなみたなりけり○

便りあらハあまのいさり火ほのめかせうらみにしつむ歎しぬとハ○
 忘られん物ともしらて秋風を寐やの扇のなまねきけん
 高砂や暮る外山の松風を入逢のかねに吹合せつゝ
 鹽みてハかつらか枝を枝折にてあしへの田鶴の月に鳴らん
 かたをなみ月の出鹽の浦風や雲井にすめる鶴の諸聲
 のかれ來て我すむ山の山水やうき世にまたもなかれ出らむ
 山科出雲守か禁中橋の枝とて送られけるを
 手折こし雲井の庭の橘ハ桂の枝のこゝちこそすれ
 今城中將殿より上様のかさしにさし玉ハせける藤の作りはななりと
 て被爲下けれハ

天皇のかさしにさし、藤なみの深き恵をいたゝき奉る

西四辻公葉朝臣と滋野井公壽朝臣と攘夷の事にて大和國へ脱走之時
 御迎ニ参りて京ニ歸りぬ其後かの殿ニかりに仕へまつりけり其時よ

みて給ひたる

手束弓矢竹にのみハ思へとも世に數ならぬみをいかにせん
大和川今ハ思へは水のあわのきゆとも我みかへし物を

信よし御返し

中々にうき名やたゝん大和川かへらぬ水に沈みはてゝハ

公業朝臣

行なみの立かへらすハ大和川なかれてはやき名をや流さむ
歎くそよをしからめしと思ほへし其いにしへを今に返して

高松公村朝臣九才の御時歌よませ給ふよふにと頻りにすゝめ奉りけ
るによみ給ひたる

とこの間に椿庭とこ琴ひけはひはとふた有にけるかな
庭の面にとまる鶯しをらしや今朝鳴聲の長閑之けり

滋野井公壽朝臣によみて奉りたる

誓すと小指押切ぬる血いろもかはかす黒も干黒カなくに

朝臣御返し

數ならぬみにはあれとも今更に誓しことのなにかはるへき
花も又ちるへき時にちるものをなからへし我みこそくるしき

信よし御返し

花も又ちるへき時にちるものと思ひ定しみこそ安けれ

三好林田氏之追悼

武士はみなかくこそと忍はるれちりし若木の花の二もと

文久三亥年十月六日西四辻公業朝臣と共にしくれの歌よみける朝臣
のよみ給ひし

紅葉せし梢の秋の跡絶て松に残れる木枯のかせ
心せよ梢はかりといふ程も中々袖にふる嵐かな

信よし

秋暮て今朝ハ葉守の神な月しくれと共にふる紅葉かな
さひしさを我すむ軒に音つれてめくる外山の夕しくれかな

車中落葉

小車の中にちりそふ紅葉や小折にたゝむ錦なるらむ
小車の我ニハなくて紅葉ちる嵐の山に牛や向けまし
寒ければ筈もる夜はの雫さへ氷りて落る淀の川舟
風寒て夕浪高く浪花かた浦の筈屋に掛る白雪
なにハかた浦の筈屋の船待に日數さへふる庭のしら雪
打よせて歸らぬ浪の名残かと思ゆる眞砂の霜そ根深き
なみの上に月ハ氷りて行舟の筈の雫はつらゝ也けり
動かさるためしとみ代の九重や大内山のみねの松原
小車の物見の小簾の夕風にちりこそつもれ山のもみち葉
紅葉々のちり敷秋の夕暮や物見車の處せきまで

公業朝臣

木からしに向ふ車の打出も袖もにしきの下たかさねせる
村しくれめくる車の下すたれすそこも分すふるもみちかな
にしき人よ心にいつか住の江の岸根の艸のたねハまきけむ
戀しなむ心をたにもいかにしてつれなき人におもひしらせん

未孰甚赤面至極候惣而落題而已ニ致し添削宜數頼入候

公業

雪降ハみな白妙となりにけり黒木の鳥居あけの玉垣
降雪にたれかハ何を祈るらむ鈴の音寒き加茂の御社
かゝけても消ぬみかりを命にてよにかくれ家のまのともし火
よの中を有か無きかに明暮て影猶薄し窓のともし火
としへぬるかひこそなけれ文みても猶よにくらき窓のともし火

公業朝臣

たれもみな世をは祈るか男山今朝ふる雪に跡しけくして
榊はに立舞ふ袖のかけまくも雪よりしらむ加茂の神かき
尋來てうきををのかるゝかくれ家にかくれぬものハまとのともし火
まかふへき色とも見えず中々に霜に移らふしらきくのはな
かり住の蓬むくらの　　心あてにものこるきくかな
誰とたか枕の上に匂ふらむかせより告る夜はの梅か香
なかれて門田の井出の水音にふるとハ知りぬ夜はのはる雨
明くやとてまたれにけりな艸枕こゝろ關路の夜はの鳥かね
尋ねこし都の人ハ聞なれぬ軒の嵐に寐さめせしとや
九重やみはしの櫻ちりにけり今朝ハ雲井の雪とみるまで
行空はまた末遠き旅の道をかひになして歸るかりかね
見渡せハすまも明石もおほろにてかすみに曇る春のよの月
みちのくのこかね花咲山もかくありとやここに匂ふやまふき

清水せく門田の筒井深艸ゐてすむともいさや知る人のなき
人の子に旅ハさせしと思ふまでうきも數なる草枕かな
紫の雲のかけはし是ならん咲渡したる藤なみの花
見渡せハ谷の藤なみ咲にけりこや紫の雲のかけはし
雫さへ今日ハかすみてさひしきハ我山里の雨の夕くれ
かの岸に匂へる藤ハむらさきの雲のゆかりと見え渡るかな
いたつらに袖のみぬれて契り置し末のまつ山なみそ越ける
人ハいさそれとも知らし忍ハれてへにけん年やいくつなるらむ
ちるか上にちりそふ花ハふるか上に友まつ雪の心ちこそすれ
なれ衣きつゝみるめハかつけともあはすハ何のかひか有へき
ある時公葉朝臣によみて奉りたる
君となり臣となりぬることのねハ松の嵐や吹あはせけむ

朝臣御返し

松風のしるへしなくハ我ことの音に通ふへき聲やなからん

出雲風土記の中宮永芳久か後鳥羽天皇隱岐國へ遷幸之御時三保崎にて修明門院へ御書を參らせ玉ふけるときの御歌に　しるらめやうき

三保崎のはま千鳥なく／＼しほる袖のけしきをとよませ給ふけるとを書て此事を思ひ遣り奉れハ我黒髪もさかたつはかりと書り猶芳久の歌にそのかみのうき三保崎のはま千鳥あとしのふにも袖ハぬれけりとありけるを見て信よし

うき雲のかゝるむかしを思ふにも我黒髪ハ猶さかたちてと

狸の腹つゝみ打うた

月に打たぬかつゝみもさゝ竹の露のなさけに乱れそめけん

古へを忍ふの露ハさもあらめ世さへみたるゝ秋のはつかせ

秋風の吹初しより古へを忍ふの露ハ猶みたれつゝ

唐衣うら珍敷き秋風に昔しのふの露そ乱るる

古へハ猶忍ハれて物そ思ふ老の寐覺の秋の初風

公棄朝臣

ちりうかふ紅葉をかつく鴉鳥のうきねの床や錦しくらん

むさゝひの傳ふはかりをみとりにて猶雪重にみねの松かえ

堪て聞軒はの風の音もせず中々さひし松のしら雪

忍艸末葉の露を命にていたつらにのみ袖そぬれぬる

うきなか脱カ朽やはてなむ浪花かた茂き芦間の海士のつりふね

しろしめす我天皇の四つの海八しまの浦の浪も靜かに

信よし

水鳥の遊ふ入江のみなれさほなれてハさすか羽たゝきもせず

乱るゝといひこそ遣らね年へぬる心のうちにしのふ文字すり

八幡山峰の松かえ埋れぬ今も御幸のあとゝみるまで

君か代を何にたとへん久かたの月日と共にかきりなけれハ

有明の月ハ小まとにさしなから一村騒く初しくれかな
木枯ハ拂ひ盡せる山本にさす月清したそかれの宿
水鳥の鴨の川風吹添ひて月の氷りを碎くすゝしさ
鳴むしよ花よと分ん人もなし嵯峨野々奥の秋の夕暮
誰か越て山路の露ハ拂ふらん尾花かもとのむしの聲々
降雪に道こそ分ね雨露を凌くはかりの野邊のひとつ屋
さひしさハ野原か末のひとつ家をひとつになしてつもる白雪
嬉しとて聞曉の鳥か音とたかきぬ／＼のなかに聞らむ

山科出雲守曰先年大洲侯の江戸の邸に被預候節自然死罪等被申付候
節ハ先ニ死なんと思へと刀なし故に思ひ付て風邪と偽り半紙を貰ひ
小よりをよりにて十六打になして二筋よりはらに巻置き首をべて自盡
せんとせし其時よみし歌とぞ聞

たく繩に結ひあはせし玉の緒ハとけぬ思ひの終りなりけり

信よしか歌

ひとりねの思ひやいかにつらからむ雪に羽たゝく池のをし鳥
水鳥の浮巢の床や拂ふらむ折々寒き雪の羽たゝき
かり人の艸ひき結ふかけもなし雪に日を積むむさし野々原
鷹すうるこふしも寒しかり衣ひも夕暮の小野々白雪
いたつらに今宵もいたく更ぬるかたのめぬたにも待ハ習を
たのめ置て來ぬハ我みのとかならし今宵も待て誠くらへん

加茂社家藤木何某か歌よみこしける返し

音に聞別いかつちの宮人と共になりゆくことぞ嬉しき
閉暮にあふひの艸の千代かけてかはらぬいろの契りともかな
鏡山くもれハやかて夕立の雨になりゆくいかつちの音
立よりて見るまもいさやかみ山くもれハはるゝ夕立のあめ

小泉筑後守年賀

年をへてみつ子に歸をおさな名を又來ん千代の初とハみよ

新嘗祭の御幸を拜し奉りて

尊とさの余りをみせて氷るらし雲井の霜に落るなみたハ

庭火たく雲井の霜の夜神樂を只打とけて神やめつらん

武士の矢竹心もいかならん夜はの御幸の御神樂の聲

寒けさハいと、眞砂の霜の上に雲井の月を詠めつるかな

尊とさに落て氷れる白玉ハ御幸待まのなみた之けり

衛士かたく光りにやかて消ぬへし櫓の上に霜ハ置とも

寒けさハいと、眞砂の霜の上に恐れかしこみ月を見しかな

宮人の袖寒からし著衣それとも分す雪ハ降つ、

人とは、何とこたへん、久かたの雲井にすめる糸竹の聲

雪ふれば木ことに花も咲ものをはるにはかり思ひけるかな

嬉しさに恐れかしこむ霜の上に落るハ何のなみたなるらむ

世の中ハをかしき物よともすれハ宿のためきにくすへられ筒

春秋歌集跋

抑我皇國ハ天地開けし時より皇統連綿として地球中ニ獨立し神徳明かに
下萬國を照らし天皇の神武四海にあふれ古よりして他を征したる事ハあ
れとも外より征せられし事なし聊か弘安の難有みと雖とも神怒忽に烈風
を起して粉のことに碎く然るニすきし嘉永六年丑六月夷國船渡來此方
古今未曾有の大患無限御國耻を醸し物價沸騰生靈永く塗炭の苦しみを請
天變地乱ニ移り或ハ地震し或ハ日照りとなり又ハ洪水の愁を醸し或ハ衆
星飛ひ乱れて國乱をしめし或は春日の神鏡破裂又ハ内侍所の御鈴無故ニ
落而破裂すといへり其外擧て數へかたし實に天下の災害是より大なるな
し依てハ 天皇深く被爲歎攘夷の敕誼度々に及ふと雖も幕府征夷之職に
乍居敢而敕ニ不應幕吏輩彼秦檜王倫か心を旨とし或ハ虎狼の暴威を逞し
或ハ醜夷か虚喝之勢煙ニまとひ或ハ偷安因循之情ニ流私ニ和親交易を許
す爰ニ至て暴政を極め宮大臣を幽蟄し三家三卿親藩外様之内或ハ天下之

有志憂國の人等ニ虚名之罪を加へ或ハ偽て幕府攘夷之直書幕吏連署之建
白を以かしこくも和宮を申下し候坏實ニ不臣之道不盡方なし爰ニ至て中
國西海南海ハ元より諸藩大ニ震ひ起り薩長土之三藩殊ニ勝れて憤發天下
之形勢を内奏して大原左衛門督關東ニ敕使幽囚之旁を氷解し公武御合體
攘夷を令し政事變革之事を命幕府受之其後再度爲敕使三條殿姉小路殿關
東ニ下向幕府從來之不臣を正し名分を明らかに成し攘夷之事を嚴令す此
時既ニ三藩ハ元より諸藩追々上洛君側之諸奸を攘ひ或ハ幕吏之奸を切り
又ハ交易ヲ成す之姦商をほふり或ハ慷慨之有志天下ニ豎横して幕威大ニ
衰エ士風モ又大ニ變す建言投文日夜不止然るニ亥年三月幕府初度上洛續
而攘夷御誓願として加茂下上之社行幸其外諸社へ奉幣有右行幸供奉關白
殿下諸堂上官人武家ニは將軍を始として諸藩供奉猶石清水行幸此時神前
ニ而攘夷之節刀可給之所將軍虛病を構へ供奉斷り依之 天皇逆鱗人心幕
を見下ス猶大和國行幸神武帝御陵御拜軍議可被爲在と之然るに中川宮會

薩等之奸謀ニ依而八月十八日俄ニ大變動を生し堺町御門警衛長州之兵士
を被退依之三條卿以下七人長州へ脱走其外國々關係之諸役等被止參内依
之皇都之騷動不大方然れとも諸人其故を不知爰ニ至ツテ宮堂上卅余家幽
囚ニ此時既ニ大和ニ於て諸浪士勤王を唱へ大ニ動乱續而但州生野ニ一舉
をかもす是攘夷之不被行か故ニ此前五月十日攘夷之敕諭を重し期限を不
誤夷艦を攘て天朝賞之ニ御簀を以す然るに去年八月無故ニ敕勘を蒙りし
を歎て甲子六月長州之兵士洛外ニ來る屯集種々歎願有之然れ共奸徒妨之
終ニ用事なく故ニ憤激之徒怒リニ不堪終ニ七月十九日之動變ニ室市中一
時ニ賊藩之爲ニ焦土となり此時も又雲上廿四家幽閉此前後常野二州之騷
き漸々冬ニ至り北越之騷となり其響京地ニ震動積雪正義を埋メ春ニ至り
氷雪と共に軍氣解く且又尾老公諸將を卒て中國藝州迄下向之所長州因循
之論發して三老臣之首級を献して大ニ謝罪幕令五ヶ條を請爰ニ至老公浪
花ニ歸陣然るニ幕府之命長州父子並ニ七卿を具して東下を命す然りと雖

も尾公委任之命今度之所置如何ん共致しかたし然るを朝廷尾公を召し猶
關東ニ敕して曰將軍上洛之上至當之所置を可加之命有此時閣老松前豆州
宮津白川等上京兵庫開港之願意并ニ歩兵を以九門警衛ニ易ん事を奏ス此
ノ闕白殿ニ於て嚴重御差止メ夫々續而日光之神忌として宮堂上地下官
人日光へ下向此事漸く終りて後五月廿四日將軍進發長州追討として下向
此軍裝を以參内被相願候得とも不相叶同廿六日浪花城へ下り之先陣惣督
紀伊中納言井伊榊^{原脱カ}を始として中國ニ向ふといへう然るに我幽囚之起りと
申は抑將軍上洛之事ニ依而兼而京大津膳所邊之間ニ於而將軍を討之策も
有之哉之風聞有りと尤膳所にて之事件有と或は地雷を發して將軍を膳所
城中ニ討之杯之説まちく之よし扱會津之命として暫時尋問之事有之趣
にて新選組といへる無頼之惡徒大勢高松殿ニ來り應接遂ニ六條之惡徒か
巢穴ニ連られ種々之難題を問掛無躰にむち打剩へ皇國之御爲兵庫開港御
面無之様申立其外書類等を奪ひ公武之間を離間する杯と申立責問しはく

我生來愚成りと雖も誓而勤王之志を立生而は國恩ニ奉報死してハ忠義之
鬼となり或ハ七度死七度生替るとも天朝と共ニ如何て夷を討さるへきい
かて君之爲に死せざるへきと兼而を思ひ定し上ハ今や死なんと思ひ定め
て其事にも及ひしか又つらく思へは死ハ一たんニして安く從容死に就
かたしと左すれハ只々命をまたんにハしかしと思ひ定めて居たるに其後
ハさまでも責さりけり

猶同時に縛に就し矢野玄道近藤至邦ニ近藤と予とを幕吏へ渡し玄道ハ鳩
居堂ニ歸し預之猶玄道と予と一所ニ居れり依而別れニ望んで酒を乞不許
依而求水て吞て別る、死別を以す幽會を契りて故郷の老母之事を頼み予
ハ必無事と告よ兄にハ其實を聞せよとて母へ之かたみにとて著たる羽
織をぬきて之をわたし則別る夫々奉行所ニ出又六角之囚に送らる折しも
雨いみしふ降月くらく今宵もや直に切ると思ひの外聞もいま、敷切支
丹と歎申囚ニ入る葦壹枚ツ、添へる入る折しも夏なから寒くて夜もすか

ら或ハいかり又ハ不運を歎き是迄千辛万苦之志もとけず今日之事ニ至る
を悲み慷慨之涙血となるかつて目をふさく事不能短夜漸く明たれとも雨
ふりて闇き事夜るの如し扱共に絶命の歌をよまんとてよみたれとも筆も
墨もなしゆへに紙の小よりをよりて夫を文字に作り上よりも紙を當て張
附て見しに紙の中に歌のもし顯れたり此歌

今更に何か思ハん國の爲死ぬるハもとに歸るなりけり
つなかるゝ此みハうしと思ハねと待らん親に心をそひく
命をは物の數とも思はねと待らん親の心をそおもふ

いまはたにいかで動かん兼てより我ふり居し大和たましる
扱今ハ何時切られたりともよしとて互に笑ひ居たる内呼出したたり夫より
吟味所といへるにて六條にて問ひし様を可申様申ニ付其通りを申出置候
處又と申て夫よりハ會所と申て役留メ之等扱かりニ入置場所にて宰外の
獄舎之外々とハかはりて亥子前後國事嫌疑にて幽囚する人而已多く外々

の事にて居る人ハ少し扱其人々ハ有栖川宮諸大夫粟津右馬介應司殿之内
青木右京亮吉順醍醐殿之内板倉筑前介三條家富田織部元長州之藩明闇寺
玄同山崎寶寺ノ探元日向慈眼寺胤康大津尾花川川瀬太宰十津川田中邦男
同深瀬仲麿姫路ノ井田親之介東福寺之觀海長老彦根永源寺老僧龍華院機
外長老馬場徳太郎安野禎藏長州之大野四郎左衛門中子孫太郎同學之介河
野理兵衛等六人銀山一舉之士木村愛之介伊藤良太郎三新健介尙外ニ村井
修理少進等外ニ姉小路殿御横死之節御太刀を持って逃去りし金輪勇扱と申
いまハ敷物も有之候得とも多くハ國事之人而已之日々義論大ニ盛んニ
して且揚り屋之村井氏ハ獄中第一之正義家ニ其外賊ニハ對州之宗次郎と
て薩州侯之連枝と號し大和邊にて幕を打廻し多分之家來を遣ひ大ニ賊を
成しハ者或ハ山井蝶二彦根之源六讚岐熊但馬之主稅其外人殺し押入強盜
等外宰ニは數を知らず居れり扱此所にハ國事の人多く居候ニ付書物等も
澤山にて或ハ詩を作り歌をよみ繪を爲書又ハ今様を歌ひ樂之賦をしらへ

或は國事之議論又見込之策を立中にも其好む處ニ隨ひて遊ひをなしたり予杯ハ日々歌をよみ十二三人程の弟子をとりて殊之外繁用其時之歌集ハ粟津氏ニ有り四五冊も有るへし扱其年之冬より春に至りて皆々瘦といへる病ニかゝれり予も相病みて六十余日にて漸く全快には及と雖も大ニ衰弱致したり然るに追々出獄に相成候處予と大津故梅田源二郎之妻の弟上原洞藏寶寺探元と村井氏生野の三人而已殘れり其内日向之胤康も病死生野之三人も終に病に掛りて死す長州の大野中子已下も彼國へ送り殘る者ハ誠ニ少く成りゆき扱奸人ハ惡ますんは有へからすにくめハあたをなし候物にて金輪勇か讒言請なしと申候間替致し村井氏とハ向ふ合せにて日々國事之物語リニ晝夜を忘れ或ハ泣又涙にむせんで物語りを止むる事も多く在之或ハ題を一日替りニ出して歌をよみ其外尊攘新話胡蝶之陣法之書其外種々を寫取り又ハ慷慨詩歌集を巽み又一橋氏之罪狀を揚ケて一冊を認め候杯様々有然るに卯年十月頃高松殿には御いとまニ相成候と申立

無宿とも之獄中ニ入たり出獄之上高松殿へ御義論申上候處決而左様之事無之夫々御周旋之廉も相分り候ニ付而は幕吏之奸謀金輪勇等之讒訴ニよる處又吾か幕吏にこひざるか故ニ扱賊とも計りむ候處へ間替大ニ難澁此所に銀山一舉之士伊東良太郎居兼而我名をしたひる候々予を上席ニ直し師父之如くいたわり吳申候故ニ別ニ難澁と申も無之と雖も外とハ違ひ明ても暮ても賊共の咄しか外聞事なくして過しか又元の會所といへるに返し吳候て養生せし内彼金輪勇と申も首をはねられたり爰ニ宮川介五郎とて三條之制札場一撃と申て長州朝敵之制札を取除ケニ掛りて二人ハ即死宮川ハ深手ニて幽囚せしを予かいたはりて終に全快せしか此人予か外の獄中ニ居るをかなしみて衣類紙等を送れり此時の書の奥に宮川長春鎌倉の土のひとやにくらへても君か心の猛をそしる

右よみてこしたりしか是も霜月の末頃國へわたし其外極月のはしめより日々罪人の始末を附中にも極月七日頃右金輪勇も切られたり予入獄のは

しめより彼か悪事を大ニにくみ度々のしり耻しめ候處其恨を以て我を
は讒せし之然れ共終に切れしハ誠に々々心も能事之し同八日九日十日十
一日と追々ニ片を附既ニ十二日ニ至り申候所右牢屋敷之近邊又ハ御所中
ハ元より市中とも大騒動のよし此上獄中之者如何所置致し候哉と此噂の
み致し誠ニ諸藩薩兵をはじめ五卿も追々上京之風聞相聞大ニ相歡ひ居殊
ニ村井氏にも度々文通大ニ相歡ひ被居候然る處十二日夕方迄ニ病人其外
之者ハ夫々相ゆるし歸したり扱夕方村井氏の上下大小等之事迄聞合ニ參
候ニ付寂早出獄之と自身ニも被相歡又我等も歡ひ居候處扱村井氏揚り屋
を被出候よし如何と様子を相待る候處會所之人足あわたしく走り來り
て只今村井様を三度ニ切て首を落し候と申ニ付靜ニ其様子を聞候所村井
氏を吟味所の横手を裏の土たん場のかたへ連參候よし依其方へは可參之
儀無之の趣被申候よし然るを強て引立參候内早拔身にて跡より走り行切
り付候よし村井氏も今ハと思ひ 今さらにいかて何々と被申候内又二の

太刀三の太刀にて首を落し候よし然るを其掛りの寄騎三人程吟味所の上
より見て笑ひ居候との咄し之し其内追々様子を聞候處彌以暴殺致し候ニ
違無之誠ニ殘念千萬實に憤激ニ不堪之至此上は國事の者にてハ差詰メ吾
等之上原か探元成るへしと元より覺悟ハ兼而之事ながら只今迄ハ村井氏
之出るを歡ひしに手の裏を返して直ちに決死之姿ニなりぬ兼てハかくも
有んと思ひしに只今忽ニ我みの上となる事實に無念の至り之し扱夜ニ入
て陣羽織著したる二人鎗をもたせ其外寄騎同心何程と申數も不知とや
と入來候哉否哉諸方の獄中をからくと明させ夫々呼出し候所何れも賊
とも殊ニ兼而切らるへしと心當りニ致し候者共之然れ共大勢取騒き口々
ニ申候故何事を致し候哉一向ニ不相分然る處裏の土たん場へつれ行候趣
にて「ヤアツト云ふと思へは斷頭の音致し候而已にて終に十一人を切りし
而已にて其儘皆々引取り候様子故當夜ハ是にて相止メ可申何れ明日にて
も跡ハ切るにやと噂致し居候處又々くかりを明て大勢入込み來れり故に

寂早今宵ハ是迄成りと致候て心静ニ決死のむねを定メ相待の候處へ安の如く又々諸方の獄中を明夫々引出し候然れともいまた會所は明さる之處大勢入込み來り候ニ付すハ只今と相待候處ニ卯兵衛と申者を呼出し候此者一人にて又跡をばたり故ニ我等ハ如何致し候哉と相考へ居候内六七人斷頭之音聞ゆ然る處亦々大勢とや〜と押來候ニ付誠に此度ハと存進みより待請居候處さあ〜皆々御免ニ相成候間勝手ニ出可申申立一人ツ、御禮ニ出候様と申立繩ハかけ不申壹人々々よりき同心の前へつれ行候ニ付右ハ偽て切るなるへしと疑ひる候處追々に雜具をはこひ出候既に我等をも右寄騎同心等の前へつれ行一々名を申て右ハ此以後心得違無之改心致し可申申聞候之尤双方とも刀の柄に手を掛拔身の鎗をつき當申聞候猶又此上御上へ御苦勞相掛申間敷急度改心ニ相違無之哉と申聞否とも申さハ眞ニ切付可申之勢心中ニハ死すともいかに勤王之改心可相成哉ト怒リニ不堪と雖も改心可致と申て其處をのかれ夫より門外ニ出たれとも今更

とれへとも辨へ無之如何可致やと相考へ居候處へ阿州之藩岩井平次郎と申者之舍弟與一郎と申者ニ出會猶あれと略す

都を思ふてよめる

思ひ遣る程ハ雲井の月影を袖に宿さぬ夜はもなき脱カかな
道絶て今ハ人めをはゝかりのせきあへぬものハなみたなりけり
たよりあら海士のはいさりひほのめかせうらみに沈む歎しぬとは

歳暮述懐

新玉のとしの數そふ歡ひにへり行ものハいのちなりけり
世とゝもに曇る今宵の月影になみたの雨もふるたもとかな
物思ふ夜はの枕の秋風になみたそゝかぬ曉そなき
さひしさはなみたにかこちふる雨の雫ひまなき秋の夕くれ

述懷

國の爲こゝろはちゝに碎とも
ひとつもうせぬやまと魂 信善

紅葉見に 國の爲死ぬるはもとに歸るさの
まかりて にしきハ山の紅葉をやきん 信善

目次

- 一 八多浪
- 二 御親兵
- 三 生ひ立
- 四 上京
- 五 當時の形勢
- 六 甲子禁闕の乱
- 七 當時式部の心事
- 八 日光へ下向
- 九 入獄
- 一〇 出獄
- 一一 江洲の一擧

一二 北越出陣

長谷川正傑略傳

一三 車駕東幸

一四 横井參與殺害事件

一五 興覺寺

はしがき

夫れ十五歳を丁年となし三十三を男盛りと唱へ四十は最早初老と稱し四十二歳の厄年を無事に過さは家督を子孫に譲りて隠居仕度に取掛らんとせし幕府時代に於て當年最早四十歳なる集内式部は(當時久兵衛)實に妻子をも養ふ能はざる甲斐性なしの久兵衛にて通りしなり男子既に初老を過きて尙且蜚ばず鳴かす人間の相場も大抵定りたるものなり親戚も彼を見限り家族も彼に困り行末を案して時に暗涙を呑みしは一再ならさりき當時もし徳川の天下にして泰平ならんか彼は遂に役立たず甲斐性なし等の餘り香はしからざる形容詞を戴きて五十年の定命を冷笑裡憫笑裡に終りしなるへし然るに天何の意あるか商家に生れたる彼に文學を教へ算盤を弾くへき彼に古學を傳へ田を作らすして詩を作らしめしのみならず親戚家族の餘り喜はさりし常盤井仲衛矢野玄道武田斐三郎三輪田綱一郎等の

師友を與へて青年久兵衛をして家傳の商人たるに最も不適當なる感化と修養とを獲しめたり

商賣専門の親戚家族等か彼を役立たず甲斐性なしと視たるは尤ものことにて彼は實に其通りにてありしなり

然しなから當時彼をして俗事の上に勉強せしめ向ひの太郎の如く隣の次郎の如く所謂世渡り上手にてよく役に立ち甲斐性者たらしめは果して如何只稲鉢の底の如き壺大の天地に踞踏して其一生を始終したるならんに天は彼を那の境遇に置き而して別に其心境に向つて犁鋤を加へしもの曲折の妙意實に不可思議なるものあり

彼は實に此使命を帯ひしか爲めに氣長くも男子四十歳まで如是の生活を續けたるか果然遂に時は來れり

于時万延元年の春櫻田門外飛雪の中一劔天に倚つて寒かりしより天下の志士中央に馳せ參するもの多し於是乎彼四十二の厄年を提けて奮然蹶起

し妻子を捨て、京に上り日夜王事に奔走し常に死生の間に入出す或は三ヶ年の久しき獄裡の苦を嘗め其出獄するや直に江州に勤王の旗を擧げ尋いて

天顔を紫震殿に拜して勇躍北越に出陣し轉戦幾合凱至の後尙頻りに君國の事に心を勞し殆んど一息の隙をも餘さず國家の爲めに活動せし様宛然活動寫眞を視るの觀あり是れ蓋し時勢の生みし一の奇現象なるへしとは雖も抑も亦中江藤樹先生發祥の地磐碇禪師德化の郷たる我大州の生みし一産物たること必ず因縁する所なしと謂ふへけんや夫れ然り彼は實に已むに已まれぬ眞心を先天的に稟有せり而して一たひ其適所に立つや猛然其盡くすへきを盡くし敢然其致すへきを致し自己が有てる總へてのものを君國の爲めに捧けて悔いす而して辛酸十年漸く事功の世に認められんとするに方り旻天何の意そ彼に最後の鐵槌を與へ突如として彼の衣冠を剝き忽焉として彼の舞台を閉ち故郷に錦を飾るに代へて反つて流謫の一

孤囚として郷國の山河に見えしめ秋雨蕭々悲風枯枝に咽ふの夜人里遠き山寺に於て終に醒めさる眠に入らしむ嗚呼歲月流れて茲に五十年世人忘れ郷黨忘れ甚たしきは親戚故舊も終に全く忘却し了し今や口碑さへも残らすなりて草木と共に朽ち果てなんとす

大正六年十一月七日偶々玉城家(式部夫人の實家)倉庫の反故類を焼却せんとて取片附の折柄不圖式部に關する書類を鼠族の巢裡より發見し破れたるを繼ぎ損ひたるを考へ校合考査の上連綴して茲に一鑑の略傳を物するを得たりこれ素より不完全なるものなりと雖も將に丙丁童子に與へられんとせしを危く余か手に收めて兎も角大牀編することを得たるは誠に欣幸とする所なり

傳へ聞く今より約三十年前式部の事蹟につき其筋より調査の爲め此地に來られしか當時何等得る所なくして空しく引取られしと嗚呼當時の好機に於ては之を逸し却て三十年後の今日に於て之を發見するに至りしもの

抑も天意の別に存する所ありて然る乎哉

于時大正七年一月十九日式部の傳を綴り終りし夜半大洲僑居に於て

長井 石 峰誌す

一 八多浪

伊豫の國大洲の町を肱川の碧流に沿うて下ること二里許粟津祇園社の下瀬を渡舟して彼岸に上れば八多浪の大松とて一大老松の亭々として天を摩するあり南枝長く延ひたる下萩すすき抔茂れる邊さゝやかなる墓地ありて其中央と覺しき地點に西面せる古き墓あり刻して釋僚正不退位と云ふ寺院は興覺寺とて臨濟の精舎なるに眞宗の法號を銘するも奇なり試に寺僧に就いて其何人の墓碣なるやを問ふ寺僧識らす去つて村人に問ふ村人亦知らず偶々田畝の間七十余の老翁あり余か爲めに説いて曰く今より約五十年の昔彼の寺に不可思議の一人物起居したりき年齒五十歳許軀幹長大容貌魁偉頭は總髮にして鬚髯を蓄へ眼光爛々として人を射り只ならぬ面魂なり常に打沈みて餘り口を開かす室内にわ床上に御紋章附の太刀を飾り傍に當時貴顯方の物せし詩歌など張交せたる屏風を廻らし窓下の古机に倚りて終日書見又は書き物をなす嘗て偶々衣冠を著けて東方を拜

するを瞥見せしことあり當時村人相耳語して曰く彼は元と大洲の産巢内某と云ふ都に在りて久しく宮仕へし、か何か恐ろしき事を爲して歸來せし由近く可らすと墓裡に眠れる人即ち是なりと

嗚呼是なん今や世人にも郷黨にも殆んど忘却し去られたる我維新の勤王家巢内式部か其忠魂義魄を埋めたる所にてありき

抑も巢内式部とは如何なる人なる乎試に大日本名辭書一千百〇八頁を閲するに下段に記あり曰く巢内式部は勤王家なり伊豫の人名は親善(信善)後式部を四鬼武鳴生とも云ふと改む高松家(保實朝臣)の雜掌となり勤王の志士と交り國事に奔走す近藤勇の隊に捕へられて獄に下さる後赦されて明治以後軍曹となると

右末文明治以後軍曹となるとあるを見て世人或はあゝ軍曹かと輕視せんも知れされと明治以後とは誤りにして實は慶應四年に御親兵取締の意味にて軍曹を拜命したるなりき史を按するに奈良朝の末弘仁三年四月鎮守

府の職制を改められ將軍一人軍監一人軍曹二人醫師一人弩師一人となし將軍は五位軍監は六位軍曹は八位とあり當時位階の最も尊まれし時代に於て八位を賜はりしは相當の位置を證するに足る願ふに文治の昔源賴朝か總追捕使として天下の兵權を掌握してより兵權は代々武家の專有に歸し朝臣は武職の名あるも其實なく只榮位として空しく之を戴けるのみ斯の如くにして朝廷は爾後職制改正の必要もなく其まゝに數百年を經過して竟に維新の際に及ぶ慶應四年式部か御親兵一隊の長として仁和寺總督の宮に従ひ越後の賊を討つに方り取り敢へず軍曹に任せられたるものなり

先是鳥羽伏見の役後始めて御親兵を設けられて洛外黒谷に屯集するや式部は實に左の命を拜しぬ

黒谷人數取

縮被

仰付候事

六月

陸軍局

軍曹拜命の辭令書は散逸して見るを得されとも左の公文によりてこれ以前既に任命ありたることを知るへし

御用候間只今早々傳達所に可有

出頭候也

二月廿九日

辨事

役所

軍曹 巢内 式部

鈴木 三樹三郎

又次の文書によりて當時軍監を置かれしことを知ることを得へしこれ蓋し北越征討以前のものなるへし

御申越之條々以本書御答ニ及候

一金百五拾兩

會計方々可相進候

一御旗 壹本

一袖印 拾枚

右相送り候

一建言名前肩書御親兵ト相記御坐候是ハ
少々差支申候何トカ御勘考可然候

二十九日

巢内四鬼武殿

二 御親兵

御本營
軍監

太政官日誌によれば御親兵を置かれたるは明治四年二月薩長土の三藩より禁衛の兵を徴されたるを始めとする旨記載あれどもこは組織一變の時にして始めて御親兵を置かれたるは實に慶應四年なるが如し傳へ聞く當時始めて御親兵の置かるゝや數百年來絶へてなかりし御事とて
孝明天皇 皇太子(明治天皇) 御同列にて閱兵式を行はせられこれ寔に朕の兵なりと最と御満足の御敕語を賜はりしと拜承す尋て北越の賊を討つに當り仁和寺總督の宮が卒^{率カ}るさせ給ひし四百名の兵は即ち是にして式部は實に其内百三十一名の取締たりしなり(軍曹)
今般不圖發見せられし式部に關する書類の中左の文書の如き明治以前既に御親兵の存せし一證となすべし

越後(破損不明)村
(不明)謙作 仲

宗

年十三才

右者今般

御官軍巢内四鬼武様の差上候ニ付
此村人別相除候處相違無御座候依
テ一札差上申候處如件

慶應四辰年八月

右庄屋

關口莊右衛門印

御官軍御親兵取締

巢内四鬼武様

御内

御家内衆中様

勤王家集内式部傳

(附言)

これ當時十三才なる少年宗次なるもの一身を君國に捧げて御親兵たらんことを出願せしにより其村の戸籍を除きたる庄屋の證明書にしても最も珍とするに足る又一面當時の少年が如何に義勇奉公の念に篤く自己か戸藉までをも棄て、一命を差出し、雄々しくもけなけなる意氣を察すべきなり

因に是非茲に附け加ふべきことは今度古反裡より發見せしものにして右宗次上洛の後母より送くりし心こめし書簡なり水莖の跡は覺束なき蚊脚の女文字にて判讀に苦めども田舎の一婦女に似ず武士的精神の活躍し愛子に對して義をすゝむるあたり真に見上げたるものにて想ふにこれ決して只の土百姓にてはあるまじく確に庭訓ある郷士格の妻女たるべしと察せらる左に之を掲ぐべし

(破損不明)殿便りにまかせ申上(り)何々くらからの(九重の意?)の大君におんみちかくつかへまつろふ仕へまつる(身のはまれ朝夕に巢内様を神とも兩親とも思ふて仰せそむくなよ(負くなよ)今ではいやしき身の上なれど御先祖の名をけがすなよたゝた、其身大切にほうばいしゆうと口ろんすなよ二つなる印ぞや(印は首即ち命ナリ)かりそめならぬ御をんを送る迄は我身の印と思ふなよ君と親との印と思へ謙作殿(夫無事でおわす時なれば御禮の印のへんかも(式部より歌を送りしものならんそれに對して)上りられど何と申すもびよう中ゆへ心にまかせず文武兩道に心かけて人のかゝみになれよかしかならず、かり染にもあしき心を持たぬやう母が頼みこれぞかしおしき筆留(り)目出度(り)

川 本 宗 次殿へ

母 より

菊月中二日

右宗次なる者如何なる家の子なるや不明なりしが其後式部の物せる諸種

書類を取調べつゝある中反古の中にふと左の記事を見出しぬこれによりて有志家の一族たることを知るを得たり)

〔予慶應四年〕七月越後柏崎の陣所にありける時江戸坂一舉の人川本杜太郎の舍弟宗次十三歳隨從を乞ふ依て之を許し北越より連歸へりて京都の我宿所に置く云々〕

其後同人に係る記事なしあゝ少年宗次の行末如何に成りけん

三 生ひ立

巢内式部諱は信善通稱は久兵衛幼名を民三郎と稱す文政元戊寅年十一月七日伊豫國大洲比地町に生る父は松井八郎兵衛母は初子世々染物業を營む兄二人あり長は七郎俳人圓外として俗謠伊豫節に歌はるゝもの是なり次は伊三郎別に一家を起す

式部幼にして巢内久兵衛の養子となり養父没後久兵衛の名を襲うて書籍

及び藥種類を商ふ是より先き妻たみ子長男鬼藤太を遺して没す仍て親戚玉城嘉吉の女縫子を迎へて後妻となし三女を擧ぐ長はリョウ次は豊三は菊江と云ふ菊江は先年既に世を去りたるも夫人縫子(八十六歳)並に長次女は共に健在す(大正六年十二月)式部の少年時代のことは殆んど傳はらず要するに意地強き一兒童なりしが如し只店頭に在りては書を読むことを知りて書を賣ることを知らず爲めに養父の小言を頂くこと屢々なりき青年時代に至り市外阿藏八幡社の祠官にして國學家たる常盤井中衛の門に入り國漢學並に和歌を學ぶ隨つて同門に出入せし武田竹塘青野完治矢野玄道等と交り特に矢野玄道とは最も親しかりき式部身體長大堂々たる偉丈夫なりと雖も票性寛厚寡言にして大度あり家に於て叱々の聲を聞かず其人と語る極めて靜和にして敢へて高聲せず敢へて爭論せず何處となく長者の風格を備へき居常書に親み和歌を好み又謠曲を樂み時に興に乗じて狂言など立ち舞ふことあり嘗て一日藩醫菊山氏を訪ふ座に畫家幽賞齋あり

筆を採りて襖に戯畫を物す即ち一士人の臂部を捲くりて海上に向け放屁一發沖合の黒船(維新前外國船を呼んで黒船と云ふ)爲に轉覆沈没せんとするの圖なり式部乃ち賛して曰く「あめりかの船のへさきも飛びちりぬ草木もなびく君が代なれば」と一座洪笑せりと云ふ

性酒を嗜み斗酒尙辭せざる概ありて家人も曾て彼の眞の酔ひしを見しことなし時々常盤井氏を訪ふや師弟共に大酒客のことゝて相對して兩々杯を献酬して時の移るを知らず隨行の少年等待ち詫びて玄關に假睡するを常とす夫の安政二年の大地震の晩の如き他の家具には目も呉れず只晚酌用に備へし一升徳利を提げて倉皇門外に飛び出で長く家庭の笑ひ草たりきと云ふ

四 上京

式部一商賈に身を措くと雖も常に天下國家を以て念となし家業を顧みず故を以て家道大に衰へ頗る窮乏を極む(此間妻縫子の苦心慘憺尋常ならざ

りきと云ふ)時に世は安政の末つ方國事益々非にして遂に所謂安政の大獄起り大官の幽屏黜陟相繼ぎ勤王の志士の毒刃に斃るゝもの夥し尋いて萬延元年志士義憤の劔櫻田門外に閃きて天下益々騒然たり式部慨然決する所あり身を挺して國難に赴かんと欲し遂に家を閉ち家族を妻の實家たる玉城家に託し同年夏六月死別を期して國を去り京都に上る縁を求めて(或は矢野玄道の援助を得しならん)高松保實朝臣の雜掌となり名を式部と改め(後四鬼武又は鴨生と改む)盛んに勤王の志士と交り國事に奔走す式部自記慷慨歌集一の卷に左の記あり

世の中騒かしくなりければ急ぎて都に上りける時よめる

雲の上は昔のさまにかはる世を

打歎かるゝ今日にもあるかな

雲の上に照る日のかけはさしなから

いかに曇れる天の下そも

同卷又左の記あり

文久二戊年長月十一日祭主藤波二位殿奉幣使として伊勢神宮に發遣於禁中御神事あり此日高松正三位保實卿の御供して日の御門より南門の内承明門の前を過るに此時は未だ禁中と雖も草深く茂りて御袍の袖に露のちりかゝりけるを見て

淺間しや雲井の庭の草の露かゝらぬ身にも袖そぬれける

大内の山の下草ひく人もなくてふりそうわか涙かな

爾後勤王の志士と往來し頻りに國事に奔走す文久三年五月十九日には三條公(實美)の命を受けて兼ねて攘夷の旗擧げせんとて大和へ脱走中の滋野井侍從公壽朝臣並に西四辻公業朝臣の二公を説きて都へ迎へ歸へる

公業朝臣のよみてたまひたる

手束弓矢竹にのみは思へとも世に數ならぬみをいかにせん

大和川今は思へは水沫の消ゆとも我身かへらしものを

信善

中々にうき名や立たん大和川かへらぬ水に沈みはてゝは

(外數首)

同年冬新嘗祭の節水戸の大越伊豫介宮田齊芳我愛之介増子幸藏大洲堀尾直人等と共に拜し奉りて

尊さの余りを見せて氷るらし雲井の霜に落つる涙は

(外十首)

五 當時の形勢

爾後式部の行動等了解に便せんか爲め試に當時我邦の形勢を一瞥するも無用にあらざるへし

文久二三年の頃に至り浪士輩公武合躰の討幕に不便なるを感し何とかして之を分離せんことを計り暴行益々甚たしく天誅を名として盛んに殺戮を行ひ或は足利尊氏の塑像を刎ねなとす京都所司代町奉行等之を制する

こと能はず特に長藩は幕府の逡巡して攘夷を斷行せざるを不可とし朝廷に建議し大和の畝傍山に行幸して攘夷の師を起し給はんことを請ふ朝議之に傾く京都守護職會津侯松平容保は専ら親征の不可なるを説き諸侯亦之に和する者多し就中島津氏は常に長藩と相容れさりしを以て特に揚言して曰く長藩は浪士を煽動して禁闕を擾せり幕府宜しく其罪を糺すへしと然るに公卿中亦親征の危きを憂ふる者多かりしを以て朝議俄に一變し尊融親王入朝し長藩人を京都より退去せしめて其宿衛を止め薩會等の諸藩に命して九門を分守せしむ衆皆戎裝して之に備ふ人心恟々たり毛利元純三條實美等變を聞きて入朝せしかと入ることを許されず實美馳せて關白の第に至る元純をして謹慎して命を待たしむ元純情を陳し實を訴ふ皆聽かれす是に於て元純三條實美三條西季知東久世通禧四條隆謨壬生基修錦小路頼徳澤宣嘉の七卿を奉して長門に走る時に文久三年八月なり朝廷七卿の官爵を削り且在京の列侯を召し凡そ詔令の十八日以前に係る

ものは皆天皇の意にあらず宜しく十八日以後を以て眞敕とすへき旨を論す此に至りて過激の攘夷家も亦力を朝廷に失ひ幕府再ひ朝廷の信任を得る端緒を現したり浪士等憤懣に堪へず藤本鐵石等討幕を名とし侍從中山忠光を擁して兵を大和の十津川に擧げ平野國民等^{臣カ}は澤宣嘉を奉して但馬銀山の變を起せり然れとも皆間もなく討平せられたり

先是五月姉小路公知朝臣幕府の救命を奉せざるを憤慨し之を倒して有志と謀り攘夷を決行せんとするの志あり詔を受けて近畿の海防を巡視す勝安房の幕府の海軍を率いて兵庫に在るに會し海防の一朝一夕に行ふ能はざるを聞き歸つて復命す人之を惡む五月二十日從者二人(金輪勇吉村右京)を従へ猿か辻を過く賊あり急に公知を刺す從者一人(金輪勇)先づ北ぐ吉村石京刀を執りて趨り來る公知呼吸甚た苦むものゝ如し右京刀を揮うて賊を逐ひ公知を扶けて歸へる尋いて歿す時に年三十參議左近衛中將を贈る明治三十八年九月一日正二位を贈らる式部は兼ねて知遇を受け且討幕の

謀議を共にせし公知卿の横死を悲むと共に従者金輪勇か太刀を持ちて供しなから難に臨み卑法法カの振舞を演せしを憤り後勇に對し痛く之を辱かしめき

公知朝臣を悼みて

いかはかりあらんとすらん太刀をたに手にふれさりし君か恨は
此時を思へはいと、涙湧き髪さかたちて齒かみせられつ

金輪勇を惡みて

淺間しや太刀振かさし向ひてハ討もらすへき敵ならしを

おのれのみ逃けは逃けてもあるへきに君か御太刀を持逃けにして

六 甲子禁闕の乱

元治元甲子年六月二十三日長藩の家老福原越後關東に下ると稱し兵三百余人を率ゐて長州を發し京都に到り嵯峨山崎に屯し上書して藩主父子の衷情を陳へ七卿の復職を請ひ且藩士の入京を許されんことを乞ふ遇々同

藩の國司信濃益田右衛門介等各々兵を率ゐて來り會せしかは京都の人心恟々たり

式部か物せし慷慨歌集の中に左の記事あり

長州の兵士等去年八月十八日の事件に依りて禁中へ歎願のことありて洛外伏見嵯峨山崎所々に屯集す仍つて其兵士の形勢を見んとて嵯峨鳳林寺に詣る

同十七日有栖川宮御父子を始め奉り長州の事件に依つて種々御諫奏あり其外大炊御門右大將家信公中山大納言忠能卿を始めとして六十余人の公卿殿上人等連署の建言御差出ニ相成り尙色々御諫奏ありと雖も終にそを用ゐ給はず是全く上に中川宮あり下に會津等の賊臣ありて中途に妨くるに依るなり

同十八日夜半過る頃西四辻殿の物見の高殿に上り嵯峨山崎の方を見るに遙に筒の音響きて雷の如し

明くれば七月十九日未だ明はなれざるに炮の音間近く聞へ禁門の騒は元より市中の騒動大かたならず

七月十七日に至り薩藩會津等は長藩の士名を歡願に託して兵を擁し悍然として命を奉せざるは上を要するものにして其罪斷して許し難しと建議す長藩の士之を聞きて憤悲し以て讒構に出てたりとなし一舉して君側を清むへしと唱へ益々抗辯して已ます守護職松平容保の禁内凝花洞に居ることを知り洛外に屯する者期を刻して之を襲撃せんと謀る其事早く洩れたりしかば慶喜等直に宮闕を守護し諸藩の兵をして宮門を警衛せしめ以て急に備へたり福原等既に入京し十九日拂曉國司等の兵も亦嗟峨より進みて帷子街に至り分れて二隊となり一隊は中立賣門又蛤門に向ひて進む會藩の兵出て、戦ふ長兵の公卿邸内に潜める者塀上より銃を發して會兵の後を襲ふ會兵前後に敵を受け苦戦甚た力めたり
此時薩藩桑名藩の兵公家門を出て、不意に長兵の横を衝く會兵力を得て

振ひ戦ふ激戦數刻にして長兵遂に敗れ走る

式部當時の狀況を記して曰く

同日巳の刻(十九日)頃内侍所はや御立退と相成り禁中御常の御所の御庭のあたり軍卒滿ちて既に

主上も御動座あらせらるへき御氣しきにて一橋中納言軍装にて御所中を往來し其外會津桑名等を始め階下に腰打掛け今にやと待ち御庭前に

御鳳輦御板輿をかき居奉るを見るに日と暮れ心も消ゆるはかり悲しかりき

特に此騒に乗して

御鳳輦を彦根の城に向け奉るへき由聞へける取分けて胸痛みぬ

然るに諸卒の中にも會津の兵士御所中に滿ち滿ちて或は樹下に打伏し又は水邊に足をひたし或は甲陣笠杯を枕とし又は刀鎗を提げ飽迄暴威を逞うする有様かの唐土の宋明の世に醜夷か王の都に迫りしも斯くやありけ

んと思は^へ涙止めかたし

夷らか襲ひ集へる心地してあないまはしの今日の氣色や
然るに彼さかしらども頻に御動座を促し奉ると雖も終にとまらせ給ふ
と聞きて

動きなきものとも知らて大内の山守いたく騒きつるかな

天地もとゝろくはかり騒けともゆるかぬものは大内の山

去る程に軍同時に起りて炮の音天地に響き川裂け山崩るゝが如し火は彌
々盛んにして禁中も既に危く見えて市中は只一圓の猛火となり男女東西
にまどひ車卒南北に馳せ違ふ

さて長門の兵士勤王の有志等所々に亂れ散りて今日を限りといとみ戦ふ
有様は萩の葦に野分の吹起りて花の散るか如く奸徒(幕兵)の爲めに多く戦
死す

夜は公業朝臣と共に禁中に明して

かれを思ひこれを歎きて明かぬる夜半の涙の玉しきの庭

市中は會藩の爲めに焦土となり男女ちまたに泣く軍卒共(幕府方)民家に入
りて財を盗み或は金を取りて其跡に火を放つて焼くその暴惡非道譬ふる
にもものなし

吾袖はかはきもあへす白浪のかゝりける世を打歎きつゝ

尙其燒跡に盗人の來りて財を盗むあり又其頃有志の建言に會津侯の暴惡
木曾義仲北條時政に越ゆと書けるを見る

七 當時式部の心事

當時式部は表面長州方に加はらさりしと雖も有志と共に常に彼等に加擔
し陰に陽に諸種の便宜を計り秘密の役目をつとめしものゝ如し今や書類
多く散逸して見るを得されと古反の中偶々左の如き書簡ありこれらによ
りて見るも長州人と或關係を有したるを察すへし

御話申度儀候間木屋町三條上る長州

抱屋敷にて森寺寓まで早々御入來被
成下度此段得貴意候

九月六日

集内式部様

芳野昇太郎

至急

又左の記事あり

「同年十一月十八日新嘗祭行はせ給ひける日長州追討の軍始めと聞きて

つみなきを討つたにあるを今日と云ふ今日を始に軍せんとは

かけまくも今日新嘗のまつりとも吾妻男は知らずもあるらん

同年(元治元年)冬に至り滋野井公壽朝臣の命を含みて窃に京を出て或重大なる國事の任務を負ひて西國に下る蓋し當時局最も困難危急の際式部は一命を賭して任に當りたるものゝ如しされど事極めて秘密に附し事實の内容を詳にするを得ざるを遺憾とす

式部出發に際して

身を捨て、思ひ立ぬる旅なれば死出の山路の奥もいとはし

君か爲め思ひ立ぬる旅衣いかてこゝろのいさまさるへき

公壽朝臣返へし

君か爲思ひ立ぬる旅なればやかて曇らぬ世に歸へるへき

旅衣返へすくも心せよ思はぬかたにあらしふくなり

それより浪花に出て備前備中美作安藝長州を経て筑前豊後日向等に到り
翌早春歸洛せしものゝ如し

八 日光へ下向

慶應元年三月廿七日高松實村朝臣敕使として日光へ下向を命せられ(東照宮二百五十年神事の爲めなり思ふに二百五十年祭は文久二年に相當すれとも國事多難の折柄延期せられ居たるならんか)式部供奉して下向することゝなる式部自記に「敕使は首途として八坂の神社に詣て給ふべかりしを

二十六日の夜火の騒にて俄に之を變し北野の社に詣て給ひぬ同二十八日は高松殿をはしめ東下の人々上下となく立騒きていそかし本國寺に寓せし水戸の大越伊豫介宮田齊鯉沼増子芳我等の人々に東下を告げて歸りぬ式部は昨甲子の年水戸の武田耕雲齋等攘夷を決行せんとて筑波大平山等に旗擧げし遂に加賀に上りて悲惨の運命に終りしを非常に同情せるものから日光下向の途次武田等の經由せし場所に到る毎に當時を回想して感慨無量なるものあり今下向歌集中より其數者を摘記すべし

甲子の冬水戸の武田ぬし此所を渡りしときゝて

太田川

太田川みなきる水の泡の上に消えにし人の面影そたつ

行く程に卯月三日御嶽の驛に著く翌日十三峠を越へ夕暮中津川の驛につく此所は平田氏の(篤胤)門人多き中に間秀矩といへるあり仍て同家を尋ねしに折柄竹村多勢女も來りて酒呑み物語りして古き友に逢ふか如し正義

の道同じきか故なり扱鶏の聲に驚きて別れて宿に歸へりぬ去年水戸の浪士此驛にて中食せし事彼日記にもあり其時秀矩か歌

筑波山この面かのもに道はあれと夷を攘ふ道は一筋

浪士黒澤新三郎の返へし

夷討と思ひ筑波もむなしくて過る月日の數をしを思ふ

同 大津忠雄

いさゝらは夷か首を打攘ひすめら御心安めまつらむ

同 檜村直給

大君の心盡しを一筋に思ふこゝろの何いとふへき

五日中津川の驛を立ち間氏と共に驛のはなれまで行くこれより山道なり間氏彼方を指して曰くかの左の方山腹の松林の中に白く見ゆるものは水戸の横田藤四郎とて當時十八歳なりしが和田峠の戦に父に先立ちて討死せしを父の藤十郎其首級を此所に持ち來りて竊に埋め置きけるなりこは

此驛は平田翁の同門の人数多き故に行末郷人等おろそかにはせまじと思ひて和田峠より我子の首を鉉處まで持ち來りて埋めたるなり當時親の心やいかにかありけん

と、まゝも行くも親子の中津川なかれて深き契りなりけり

楮里人之を憐んで白川家に願ひて之に石津元總雅カ雅子命と云ふ神號を附せられ小さき社を建て、祭りぬと云ふ感すへきことにこそ

夜は諏訪の驛に宿る藩士大山直路飯田守人來りて夜もすから物語りす

去年永戸浪士此驛を過ぐる時守人の歌に

ひるかへる大和にしきの御旗風我身に負ひて死ぬよしもかな

浪士龜山雄右衛門

武士のたつ矢たはさみ乗る駒の立髪分くる野邊の朝風

其夜大山等の物語に

和田峠の合戦武田彦右衛門を奇兵の將として間道を経千辛万苦して上之

山より落しかけたるに諏訪勢大に敗走す然るに山の折まがりに諏訪より大炮を構へ置き玉を込めて待つに夕暮方浪士大勢登り來る所を打込みたるにより多數討たれぬ楮先きに記し、横田藤四郎も此所にて深手を負ひ介錯を頼むにより父藤十郎之を切らんとせしを武田大夫親の介錯は不可なり余代らんとて切られたり云々

尙和田峠の合戦に諏訪勢討死五十三人松本勢七十余人浪士十四人なり此等の塚は和田峠の麓にあり

野州大平山に水戸浪士久しく屯集せしを聞きて

大平の山の麓を我ゆけば雲井のよそに見ゆる筑波根

立去りし人は昨日を昔にて青葉にこもる大平の山

日光にて

百敷や古き軒端を歎かる、二荒の宮居見るにつけても

東照宮の光りもあふかねは大樹のかけもたのまさりけり

江戸につく

江戸に著きて芝まで御供してそれより引返へし秋田侯の中屋敷なる平田篤胤翁を訪ひいろ／＼の物語りに夜ふけ曉近くなりて品川の宿に歸へりぬ

今は、や枝諸共に打攘へ大樹のかけもたのみすくなし

式部始めて日光に下り其結構の華麗に眼眩し之を京都禁中の草深く御陵墓などのいたく荒れたるに思ひ比へて憤慨に堪へず一層討幕の情を高めたるの跡歴々見るへし幕府も飛んだ賓客を迎へたるものなり

九 入獄

當時幕府は勤王の志士を惡むこと益々甚だしく式部の如きも公武の間を離間し世間を騒かし剩へ將軍に危害を加へんとするものとして兼て注意人物たりしか慶應元年閏五月に至り遂に近藤勇の率ゆる新撰組の手に捕へられ六條の獄に繋かる

式部當時の状況を詳記して曰く

「我幽囚に到りし事情を記さんに抑も大樹將軍家茂上洛の事あるにより兼ねて京大津膳所邊の間に於て將軍を討たんとの策有之哉の風聞あり特に膳所城内に地雷を置きて將軍を討つ等の説あり仍つて會津侯の命として新撰組と云へる無頼の惡徒大勢高松殿に來り應接の上當時高松家より會津侯に對し非常に力を盡して救済に勉めたれとも嫌疑重大にして其甲斐なかりき遂に六條の惡徒の窩穴に連られ種々の難題を問掛け無殘に鞭ちける剩さへ皇國の御爲め建言致候書類等を奪ひ公武の間を離間する抔と申責問しは、す尤も同志よりの頼み長州へ參り居る有志又我大洲の藩兵も長州方へ加はり我等所々へ頼みかくし置といへとも一切知らざる旨申立てぬ又建言は幾度となく致し、中にも中川宮一橋殿關白殿の御扱ひにかゝる事も有之候へ共今度奪はれたるものは兵庫開港早々差止めらるへき旨の意見書なりき

余生來恩なりと雖も誓つて勤王の志を立て生きてハ國恩に報し奉り死しては忠義の鬼となり七度生れ替るとも天朝と共にして如何で夷を討たさるべきいかで君の御爲めに死せざるべきと兼てより思ひ定めし上は今や死なんと思ひ定めて其事にも(自殺の意)及びしが又つら／＼思へば死は一旦にして安く徒らに死せんも詮なし只々命をまたんにはしかじと思ひ定めて居たるに其後はさまでも責めさりけり尙同時に縛につきし矢野玄道余並に近藤至邦の中(矢野玄道氏大厄記に此時の記事あり)近藤と余とを幕吏に渡し玄道は數日の後鳩居堂主人に預く最初余は玄道と同獄舎に居りしことゝて別れに臨み死別せんとて酒を乞ふ不許仍て水を求めて共に吞んで別るゝに方り玄道に向ひ故郷の老母の(父は疾く世を去りぬ)ことを頼み余は必ず無事なりと告げよ兄には其の實を聞かせよさらば母へのかたみにとて著たる羽織をぬぎて之を渡す玄道曰く君にして死すと聞かば余は三日を出でず必ず死して幽會を期せんと則ち別る

夫より奉行所に出で又六角の囚に送らる折しも雨いみじう降り月くらく今宵もや直に切らるゝならんと思ひの外聞くもいま／＼敷切支丹とか申囚に入れらる筈杖つゝ添へて入る折しも夏ながら寒くて夜もすがら或はいかり又は不運を歎き是まで千辛万苦の志を遂げず今日の有様に至れるを悲み慷慨の涙血と共に下るかくて目もふさぐ事不能短夜漸く明たれども雨ふりて闇きこと夜のごとし扱共に絶命の歌をよまんとてよみたれども筆も墨もなし故に紙の小よりをよりにてそれを文字に作り上より紙を當て張り附けて見しに紙の裡に歌の文字顯れたり

今更に何か思はん國の爲死ぬるはもとに歸るなりけり
つなかるゝ身はうしと思はねと待らん親に心をそひく

命をは物の數とも思はねと待らん親の心をそ思ふ

今さらにいかで動かん兼てより我ふみ居りし大和魂

偕今は何時切られてもよしとて互に笑ひ居たる内呼ひ出したりそれより

吟味所といへるに出づ六條にて答へし事を可申様申に付其通りを申し、
に又と申してそれよりは會所と申役留め杯ばかり入置く場所にて牢外の
獄舎に入らる今迄のは普通の獄にて盗人共と同座なれば吾々勤王の有志
は非常に其無禮を憤慨せしがこの處は外とはかはりて亥子前後國事嫌疑
にて幽囚せられし人のみ多く外々の事にて居るものは少し偕其人々は有
栖川宮太夫粟津右馬介鷹司殿の内青木右京亮吉順醍醐殿の内板倉筑前介
三條家宮田織部元長藩明闇寺玄周山崎寶寺探元日向慈眼寺觀康大津尾花
驛 瀬太宰十津川田中邦男同深瀬仲麿姫路井田親之介東福寺觀阿長老彦
根永源寺老僧龍華院機外馬場徳太郎同學之介安野楨藏長藩大野四郎右衛
門中子孫太郎河野彦衛等十數人又但馬銀山一擧の士木村愛之介伊藤良太
郎三新繼介外に村井修理少進又外に姉小路公知朝臣御横死の節御太刀を
持ち逃去りし金輪勇杯申いまく敷物も有之しも多くハ國事の人々而已
なり

日々議論盛んにして心もすが／＼しくなりて其始末を語りしに(自殺せん
とまで思ひし次第)皆々いたわり呉れぬ偕今にして思へは彼の時よくこそ
死なざりしものなり今は兎角の物語りも國事のみにて正論ならざるなし
或は歌を詠み詩を作り今様杯謠ふもあり或は樂譜を唱ふるもあり碁將戲
をもてあそび書類も多くありて此を見彼を讀み筆は竹衣又は藁にて製し
墨のかわりに藥を溶きて書く紙夜具衣類等も能く調ひて不自由のことな
し醫師は日毎に來りて病を見藥を與へ湯杯もいつもたざりたり夜は格子
外より燈を明して内を照らせり紙帳をつるもあり衣類をかけて蚊を防ぐ
もあり或は藁を横につりて之をあふきて風を起し蚊遣りの代りとするあ
り然れとも唯蚤虱はいかんともしがたし格子の外には番兵ありて晝夜に
番をなす食は飯汁香物を一人の料とす食すんで順に湯あみし皆座に著く
又士分役所留又は國事の者には重箱に食を入れて運ぶほうき履物を添へ
て持來る也又中かさに藥のものを入る但し兩度に出す是役所留の印なり

其外差入とて夜具衣類其他何にても好みに應じて書附をして出せば其品を宿元より入る也右の品々を持來ればそれ／＼末々迄も分ち與ふるなり。諸國事の人々も兩太夫を始め冬より春に至り免され夏の始めになりて近藤も出獄續いて長州の大野四郎左衛門中ノ子以下六人も本國へ護送となる今や余等も赦さるゝかと思ふ折柄長州の和談又々破れて戦争となりしよし

因に當時長州の状況を見るに慶應元年五月高杉晉作等奇兵隊を率ゐて馬關を襲ひ大に恭順黨と戦ひて之に勝つ毛利元純等間に居て和を講じ國論を一定せり乃ち慶親父子を奉じ山口に據りて盛に武備を講じ幕府に向ひて大に爲す所あらんとす幕府之を聽き再ひ征長の令を發す五月將軍家茂江戸を發して西上す十一月に至りて永井主水正戸川^{針カ}三郎等を藝州に遣はし長藩主及ひ家老以下を召喚して八條を詰問せしむ長藩亦書を裁して之を分疏し却りて要求して曰く幕府寛大の處置を以て謹

主父子の官位稱號を舊に復し三都の邸を舊の如く附與せよ而して和議の條件中に削封のことを加ふるを承けずと幕府は分疏を得とも尙戦端を開くへき計畫なりしを以て豫め諸軍の向ふ所を定めて兵を屯せしめたり然るに長藩の答辨其當を得たるを以て今に迫ひて妄に兵を動かすを得す又故なくして之を收むるを得す二年正月朝廷に奏して曰く毛利慶親不明にして駕御の道を失ひ家臣をして禁闕を擾さしめし罪甚た大なれとも祖先の殊勳を顧み其の食封十万石を減し父子を禁錮し重臣三人を斷絶せしめんと朝議終に之を許す乃ち使を遣はして旨を長藩に傳へしめ五月二十日を期して奉答すへきを命す長藩其の期日を延へんことを請ふ而して卒に奉答せず幕府已むことを得ずして開戦に決す此の如くして第二回長州征伐始まる式部の又々和談破れて戦争となりしとは之を云ふなり

それにつき別の獄にありし川瀬太宰は老中板倉伊賀守の命によりて非命

に死せりこは長州を朝敵と知りなから彼國へ參り國事を談せし段全く朝敵同様なりとて太宰を引立て奉行所へ行く途中余か居りし會所の前を過くる時巢内君と大聲して呼ひし故應々と答へしか早歸へりには直に裏の方へ連れ行きしと思ふ中斷頭の音どうと響きてあへなくなりぬ

川瀬太宰は同志中式部の最も親しくせし友人にして學徳共に秀ひでたる人物なり今左に其の事蹟の概略を掲ぐ(新編先哲叢談に依る)

川瀬太宰は京師の儒者なり名は定字は靜甫狂莽と號す膳所藩の老臣戸田五左衛門の第四子なり出て、聖護院法親王の家臣池田某の義子となり其女に配す女人と爲り聰慧善く其夫に事ふ太宰性慷慨にして學識あり近世史略若干卷を著す又天文地理曆筭推歩の術に精し日影表江州掌圖等若干卷を著す膳所侯其賢を聞て政務に與らしめんと欲し之を召す太宰固辭す嘉永癸丑米艦下田港に來る太宰憤激して海防の急務を策し以て膳所侯に上言すること三たび文久壬戌薩長土三侯の上京するや太

宰大に喜ぶ天下の志士奔足拮据し以て王に勤む時に海内の士幕府の嫌疑を蒙り多く其家に潜匿すと云ふ爾後益々勤王の大義を唱へ東西に奔走し京師に徹行し遂に逮捕せられて獄に繋かる捕手其家に抵り其妻池田氏を縛せんとす池田氏從容として少間を請ひ衣服を更めて縛に就かんとす捕吏之を許す池田氏室に入りて悉く良人の書類時事に關する者を束ねて之を火中に投し遂に自殺す捕手手を空うして去る太宰丙寅の夏終に斬に處せらる明治二十四年十二月從四位を贈らる

余等は日々歌を詠み十二三人程の弟子をとりて教へなどす其時の歌集は粟津氏にあり四五冊もあるへし

偕其年の冬より春に互りて皆々疫といへる病にかゝり余も亦病みて六十余日苦み漸く癒ゆと雖も衰弱甚しかりき在獄者も次第に出獄し余の外村井政禮上原綱藏綱カ寶寺探元及び銀山一舉の三人又別房に故梅田源二郎の妻の方等數人のみとなれりかゝる内に日向の觀康も病死銀山一舉の三人も

終に病に罹りて死し残る者殊の外少なくなりぬ
村井政禮とは向ひ合せにて日々國事の物語に晝夜を忘れ或は怒り或は涙にむせんで物語を止むることも多し又題を一日替りに歌を詠み其外尊攘新話胡蝶の陳法等(村井氏の著)の書種々書寫し或は慷慨詩歌集を選び又一橋氏(慶喜)の罪狀を掲げて一冊を認め杯種々物しぬさる程に卯年十月頃高松殿には御暇に相成りきと申立て無宿共の獄舎に移し入れぬ後出獄して聞けば決して左様のことなきのみか高松殿には非常に苦心慘憺種々周旋ありし廉も分りこは全く幕吏の奸謀及び夫の金輪勇等の讒訴によりしこと並に又余か幕吏に媚びさりしか故なりしを知りぬ借盗人共計りの獄舎へ移され困却の折柄此獄裡に銀山一擧の士伊東良太郎居り兼ねて我名を慕ひ居しより余を上席に直し師父の如く勞はり呉るゝにより別に難澁と云ふは無けれども外とは違ひ明ても暮ても盗人共の話より外聞くことないて過しゝか暫くして又元の會所に戻しぬ

茲處に宮川介五郎長春とて三條の制札場一擧と申して長州朝敵の制札を取除きたる際二人は即死宮川は深手にて其まゝ幽囚せられしを余か介抱して幸に全快せしか此人余か別獄に移されしを悲みて衣類紙等を送り越せり其時長春の添へし歌

鎌倉の土のひとやにくらへても君か心の猛をそしる

宮川も霜月の末頃國へ渡し極月の初より日々罪人の始末をつけ中にも極月七日例の金輪勇も切られたり余入獄の始め彼の兼ての行動を度々のしり耻かじめしかば其恨を以て余を種々讒言せしなりき爾後八日九日十日十一日と日々罪人の始末をつけ十二日至りし所何故か牢屋敷の近邊並に御所中は元より市中も大騒動の様子此場合獄中のもの如何に處置するにやと此噂のみ致す特に諸藩薩長を始め五卿も追々上京の風聞相聞へ(時勢次第に進展し薩長の連合成り討幕の機運熟し來りしなり)大に歎ひ村井氏と互に文通共に歎び居し處同日夕刻迄に病人其他在獄者殆んど赦免出

獄せしめ尋いて村井氏の上下大小等の事迄聞合せに來り杯する故最早出獄なりと余等も歡ひ自身にも歡はれやかて揚り屋を出てられしにより様子如何と伺ひ居しに會所の人足共慌しく走り來り只今村井氏を三度に切つて首を落し、と云ふ尙其次第を聞けば村井氏を吟味所の横手の裏の土たん場の方へ連れ行くにより其方へ參るへき儀無之と申せらるゝに強ひて連れ行き後より走り様に切りつく村井氏怒つて何と申さるゝ内又二の太刀三の太刀にて首を落し、を他の與力三人程吟味所の上より見て笑ひ居りしとのこと其無慘暴戾譬ふるにもなく實に憤慨に不堪

(村井氏は學深く識高く式部の特に畏敬せし友人のことゝて幕吏の暴戾を憤慨すること甚だしく毒刃を揮ひし者を調査し置き出獄の後復讐せしと云ふ村井氏の略傳を左に記す)

村井政禮は尾張國齋聖寺權少僧都某の子なり出て、村井氏を嗣き藏人所の衆となり正立位に叙し修理少進に任す人と爲り俊豪にして博く和

漢の書を読みまた兵法に達す嘉永年間尊攘の議起るに及び諸國の志士と交り力を盡すこと少からず文久三年九月幕吏に捕はれ獄に下さる慶應三年十二月十二日終に斬らる年三十七明治廿四年十二月十七日正五位を贈らる(殉難録稿)

此上は國事の者としては差詰め吾等なり余か上原か探元かなるへしと覺悟しぬ

一〇 出獄

儲夜に入つて陣羽織著したる二人鎗を持たせ其外與力同心何程と申す數不知どや／＼と入來るや否や諸方の獄戸をから／＼と明けさせ夫々呼ひ出す大勢取騒き口々に申故何事を致すや一向に分らす然る處裏の土たん場につれ行く様子之處やつと云ひしと思へば斷頭の音どうと響きつぎ／＼に遂に十一人に及ぶ右にてそのまゝ皆々引取りたる様子故當夜は是にて止め何れ後は明日に切るならむと噂しける處へ又々く／＼戸を明けて大

勢入込み來りしかば最早今宵はこれ迄なりと心靜に決死の念を定めて待ちつるか案の如く又々諸方の獄をあけ夫々引出しぬ然れとも未だ余等の會所は明けざりしに打騒ぎつゝ大勢入込み來れりすは只今と覺悟せしに卯平と申者を呼出す此者一人にて又跡を閉ちたり余等は如何致すにやと考へ居る内六七人斷頭の音聞ゆ暫くして又々大勢どや／＼と押來る愈々此度はと存し進み寄りて待居しにさあ／＼皆々御免に相成候間勝手に出可申と申し一人つゝ御禮に出てよとて繩は掛けず一人々々の與力同心の前に連れ行くによりこは或は偽つて切るならむと疑ひ居りしに段々雜具を運び出し尋いて余等をも與力同心の前に連れ行き一々名を申して爾後心得違ひ無之改心可致旨申聞けぬ尤も其時は刀の柄に手を掛け拔身の鎗をつき否と云はゞ直に切り付くる勢なり余等心中には死すともいかで勤王の心變はるへきと怒に不堪と雖も改心可致と申して其處をのかれ門外に出たれとも夜半の頃にもあり今更如何可致やと暫し相考へ居りし處へ

阿州の藩岩井平四郎並に其舍弟與一郎と申に出逢ひ伴はれて歸る」

于時慶應三卯年十二月十二日夜半なり

當時京都の形勢を見るに時に將軍慶喜は二條城に在り會津桑名等諸藩の兵盡く二條城に集まり劔を撫し腕を扼して宮門の方を望み將に爲すことあらんとす慶喜固く之を制す既にして慶勝慶永來りて辭官納地の朝命を傳ふ蓋し二侯は反對黨の慶喜を激して暴發せしめ之を口實として徳川氏を討滅せんとする計畫なるを知るか故に慶喜を宥めて朝旨に従はしめ以て宗家の安全を計らんとしたるなり然るに徳川氏麾下の士及び會桑二藩の兵等は二侯を薩長の奴隸なりと罵り將に之に危害を加へんとす慶喜嚴に之を制止す時に二條城には徳川氏麾下の士及び會津桑名松山長岡等譜代諸藩の兵其數一萬に上り朝廷方には長州の兵西の宮より入京し當時大洲藩兵西の宮を固む願ふに長州方と或連絡を保ち共に王事に盡したるものゝ如し禁衛に加はりたれとも薩州土州藝州尾州越前五藩の兵を合せて

三千に満たず故に二條城の氣焔は大に昇り動もすれば暴發せんとし衆情恟々として危機一髪の間在り十一日慶喜書を慶永に送り之を招きて曰く「麾下及び譜代の諸藩士は皆朝廷の處置に平かならず頻りに舉兵を勸む然れども余は朝敵の汚名を受けて祖宗の忠節を空しくするに忍びず故に朝命は如何に苛酷なりとも忍びて之を奉せん唯家臣等の激昂は之を制し得さらんとす今日の勢を以て推さは衝突を免るへからず故に卿を招きて之を謀る請ふ余か赤心を酌み輔導する所あれ」と潜然として涙下る慶永亦泣く既にして曰く止むことを得すは公竊に大坂に下り給ふへし家臣亦其後に従ひ宮門警衛の諸藩兵と隔りて事無きを得へし竊に下坂せるにつきての辨疏は余と尾州と之を力むへしと慶喜之に従ひ其夜松平容保松平定敬及び老中板倉勝靜を従へ竊に城の後門を出て、大坂に下る兵士等之を聞き各々後を追ひて下坂す

式部の出獄せしは其翌夜のことにして其記録中に前日來世上何となく騒

々しき由を記せるは右等の事ありしものなり徳川氏は一旦京師を脱するに方り京師の在獄者を一應悉く所分せしもの、如く此際式部か九死に一生を得しは高松家か會津侯に對して熱心斡旋せしに由りしものと察せらる

出獄の元日よめる（式部出獄の翌月即ち慶應四辰の正月元日なり）

幾たひも死なんとしつる命さへ長かれと思ふ御代の春かな

一一 江州の一擧

余筆を運ひて茲に至り實に感慨に不堪ものあり嗚呼式部享年五十獄裡に呻吟すること三ヶ年而して其間幾たびか危機一髪の運に觸れつゝ竟に慶應三年の暮に至り比叡下ろし肌を裂く極月の夜半突如放免せられたるか實に情緒乱れ感慨無量なるものありやがて吾に歸へり偕今は如何になすへきかと孤客利那の心事悽絶といはんか悲絶と云はんか而して又普通人

ならばせめて暫く閑地に就きて長き獄裡の疲勞を慰むべきに式部か熱烈なる勤王心と急轉せる時勢とは彼に一息の時間を與へず出獄直に活動を開始し翌正月六日には參與職に向つて國事の建言を敢へてし尋いて直ちに滋野井侍従の旗擧げに参加し即夜比叡を越へて江州に出陣す壯烈の舉動は實に懦夫を起たしむるに足る

式部自ら之を記して曰く

「正月六日建言の事ありて參與の役所に出て夕方滋野井家に參る然る處此日公壽朝臣(滋野井侍従)江州に一擧をなさんとす依つて余も其議に與る余元より公壽朝臣とは深き同盟あり(討幕攘夷につき)又義を見て爲さるることやあるべき只此朝臣と生死を共にせんとて其儘御供して一條寺村にて人々を待合せ夜に入つて叡山を越へて夜半頃江州阿野に著し居る處へ大原俊實朝臣も兵士を率ゐて來り給ひぬこは當正月三日夜より淀伏見の戦起りて官軍大に勝利を得一橋將軍浪華城に籠城其外二十賊(佐幕黨二十藩

を指す)と唱へる諸藩あり依て江州伊勢志摩の間に兵を向けんとするなり

江州守山にて共に兵を合し一先つ松尾山に屯集

湖水を渡る時大風大浪なりければ

關か濱舟出をすれば白馬の走るか如く浪さかたつも

松尾山屯集

武士の朝な夕なに吹くほらのかひある世とはなりにけるかな

三千歳の昔の春を松尾山まつにかひある色は見えけり

伊勢路の途中滋野井朝臣

弓矢とる身にはあらねと本末を思ふ心は引もかへさし

信善

ひさかへす心ならずは梓弓只押強く思ひいれ君

浪華の幕兵敗走するときゝて

神にそむき君に弓ひくあた人のいかてか物の末をとくへき

末とくるためしもなきに人はなと神と君とに背きはつらん
伊勢路にまで兵を進め後方賊軍の上洛を防ぎ以て鳥羽伏見の官軍に背面
の憂なからしめたりやがて大坂の幕兵江戸に敗走したるを以て軍を伊勢
路より返へし歸洛の上黒谷に屯集す此時式部は卷首に述へし如く黒谷人
數取締を仰せ付られしものなり

黒谷屯集

黒谷の名にこそたてれ此頃は赤き心の人のみそすむ

慶喜は鳥羽伏見に大敗し頼勢の支ふへからざるを知り六日容保定敬及び
老中板倉勝静小笠原長行等と共に軍艦回陽丸に駕して江戸に逃れ還る
七日朝廷慶喜の罪惡を聲し征討の大號令を發布せらる九日総督の宮大坂
城に入り給ふ十日詔して慶喜及び容保定敬等二十七人の官爵を削り尋い
て薩長土藝の諸藩に命し慶喜に與從せし諸侯を討じ大兵を發して江戸を

征せしめ給ふ総裁有栖川宮熾仁親王を征討総督とし西郷隆盛を總督府參
謀とし少將橋本實梁を東海道の先鋒兼鎮撫使とし海江田武次木梨精一郎
を其參謀とし大夫岩倉具定を東山道の先鋒兼鎮撫使とし板垣退助を其參
謀とし三位高倉永祐を北陸道の先鋒兼鎮撫使とし小林兼吉津田山三郎を
其參謀とし三位澤爲量を奥羽の先鋒兼鎮撫使とし黒田清隆品川彌二郎を
其參謀とし仁和寺宮嘉仁親王を海軍總督とし島田左馬吉を參謀とし巢内
式部御親兵一隊の長として之に加はる檄を沿道に傳へて海陸並び進む尋
いで親征の詔を下し車駕大坂に幸し給ふ諸藩皆怖れ相繼ぎて降服し或は
關東に逃るゝものあり是に於て關西復佐幕黨の隻影を見す

一二 北越出陣

天顏を拜す

前記仁和寺宮海軍總督として北越に向はゞにつき式部の自記する處左の
如し

慶應四辰年六月廿二日奥羽北越の賊徒蜂起に依り兵部卿純仁親王(仁和寺純仁親王後ノ小松ノ宮彰仁親王)總督として北國に下向其時御親兵百三十一人を率ゐて同時に出陣此日禁中紫宸殿の大庭に召さる畏くも天顔を拜し奉り並に禁中に於て總督ノ宮を始め一同へ酒肴を下さる夫より川東の練兵場にて祝炮といへることあり尋いて三條を東に進み大津にて宿陣

天顔を拜し奉りて

かしこさに落る涙は何故と問はんとすれば尙こほれけり

天皇の御言かしこみ鳥か鳴く吾妻えみしを討てし止ん

久方の月日の御旗なひかせてますら猛雄に御酒賜ふなり

鳥か鳴く東夷を討んとて出たつ今朝の心嬉しも

廿三日卯刻大津の驛をたせ給ふ粟津の松原朝風涼しく吹き渡りて木の間に錦の御旗ひらめき月日の光りまばゆく見えて兵士の打續きたるけに

王の御軍かくありてこそと思ひ侍りし

朝またき思はぬかたに出る日の影は御旗の光なりけり

今日も又君か爲にと盡すかな數へらるへき身にはあらねと

廿四日は守山の驛をたち鏡の山を過く

かみ山曇らぬ御代の印とや月日の御旗空にかやく

廿七日は越前の國敦賀の港に著陣あらせ給ふ翌廿八日水戸の義士武田伊賀守(耕雲齋)等の墳墓に詣て給ふ然るに早や四とせばかりの昔となりければ草木生茂りて一つの山となりぬこは武田父子を埋めかしこは誰を彼をとて案内の者山を巡りて指し教ゆるを聞くに涙止めかたし凡四百人はかりも埋めし處なればさなから森の如し思へは前つ方よしや君こち吹く風は荒くともいかてかへしのなくてやむへきとよみて君(武田)に與へしか今しも思ひよらす此處に來りて目の前に君の塚を見そゝろに昔を思ひ浮へて涙せきあへす

今は世に何は、かりもなき人の跡忍ふにも袖はぬれけり
なき人の跡かと思れはこれそ世に誠をつみしやまとたましひ

此處より海陸二手に別れて越後口より出羽奥州の方へ押寄すへしとて軍艦の來るを待つ其間日々今濱の松原と云へるにて練兵す
船もよふ／＼來りければ文月六日の夕加賀の豊島潟と云へる船に吾等並に五番徴兵八十二人御親兵百三十一人乗れり富久丸と云へる船には宮の御方を始め奉り壬生どの以下兵士凡貳百人許乗る住吉丸と云へるには輜重器械方を始め人は少くして荷物のみ多く積みぬ折しも雨いみじう降りていとも／＼わびしかりき翌七日のあけ方宮の御船沖の方へ進めば續きて我豊島潟之に従ひ住吉丸も續く四五里ばかり行程は風もさまで吹ざりしかやかて追手よく吹き出て其涼しさいはんかたなし漸く夜に入りて七日の月清くまん／＼たる海上は漁する海士のたく火處せきまで見えて其數を知らず海の面はさなから市をなしたる心地せり

越の海さはつる海士のいさり火に市を見せたる秋の初風
行くほとに越前の御崎といへるも遠くなり加賀能登越中の國々も遙になりて山の形うす／＼として見ゆめりこは船の向きかたによりてのことなるべし

八日朝方に至りて又能登の御崎遙に見ゆ午の刻には能登のはな近くなりぬ又次第に佐渡の國も遙にうす／＼として見えぬ元來滋野井侍従公壽朝臣佐渡の國鎮臺として長府の兵貳百人隨從の命あり余も亦御供して此國に下るへかりしを北越平定にならざるか故に都に留らせ給ふなり(公壽卿は後に甲府の城主兼知府の命あり彼國に下向)
今般余の御親兵を預りて御先に下り侍るに付ても朝臣の如何に待久に御坐すらんとはるかにおしはかり參らしぬこは滋野井殿とは深く盟約せし廉あり殊に江州にて兵を起してより今日御親兵を預りて北越に下るも此朝臣の厚く物せし給ひし兵士なるか故に君に先立ちて下りけることを深

く思ふなり猶又柏崎滯陣中御親兵ひと手にして佐渡の國を平定せんことを越後の有志輩とはかりしかとも折から軍勢少く船も亦無くしてやみぬ九日巳之刻過よりして佐渡の國弓手の方に見ゆ昨日より今日はとり分山の如き浪立て風はますく荒く吹て島も山も見えず兵士等そこゝに倒れ臥しまろびあひていとくも苦しげなりしかゝる時に外より船を寄せて襲ひ來らばいかゝして防くへきや我皇國は海國にてありなから海の軍の練ることに怠りて此法なきは歎きても餘りあり

物思へは舟も涙も止まらず荒き越後の沖の浪風

夜は九日の月明に海の上を照らしあたかも玉を洗ふか如し風は荒き浪の上を吹てまのあたり見るへき鳥影もなく漸く曉に至りて今町の港目の先に見ゆれとも風悪くて或は遠く或は近く見ゆるのみにて舟つくことを知らすよふく夕方になりて港近く著きぬ錨を下し小舟をやりて迎ひの舟を呼ひ兵士等残りなく向ひの岸に上げ夫より一同上陸儲昨日一昨日沖に

て大風大浪にゆられて先に出まし、宮の本船も後の船も見えず

越の海荒き浪風こゝろせよ宮の御舟の行衛知るまで

儲上陸して聞けは宮の御船は昨日此港へ著き夫より直に高田の城下へ進軍のよし後の船は未だ見えす此處に井田年之介と云ふ有志あり當夏京に上りて越後事情を建言す此時は此人に逢はす同志高橋竹之介變名芳我喜七に面會北越の同志二人滋野井殿に面會可致約定の所北越教導の命ありて既に出立に付面會せず

十日高田に著陣十四日高田進發黒井にて小休片町にて晝食柿崎にて宿陣此邊の道多くは海邊風荒きにより木々傾きなひきて世の常の氣色にことかはりておかし路は砂路にて歩行いと苦し故に浪打際杯行くに砂固まりてよし米山峠と云へるはさしも名高き山ながら高くはあらず幾たびか上り下りしていと物うし

儲音に聞く鯨瀉の浦民家多く賊の爲に焼かれて實に憐むへく賊の仕業惡

みても餘りあり夕方に至りて柏崎の港に著陣
廿一日出雲崎へ出兵

廿三日久田の細木山と云へる所ありその高く聳へたる峰に臺場を築き此處に薩州の兵と長州の兵と兩隊にて固む又此山の下濱路に加州の兵士守れる陣所ありこれも臺場を築きて往來を塞きたり此二ヶ所の外に山の横手に小臺場あり此三ヶ所を受取つて守る廿三日より此所にて日夜炮戦ひまなし

曉の老の寢覺もなかりけりたゞ夜もすから軍のみして去る程に七月廿三日より細木山のいたゞきに臺場を築きて日夜戦ふ終に八月朔日又大雨中進撃賊兵の臺場を打崩し山田村に進軍分捕數多し夫より進みて八月三日彌彦の宿に著く暫時休息の上直に吉田村に進む夫より三條新潟龜田新津水原五泉笹岡出湯五頭山の固めを経て新發田の城下に至る

當時我陣中に當國粟生津の産長谷川正傑鐵之進並に同高田の産室孝次郎等あり右長谷川正傑は嘗て久しく長州にありて隊長たり長兵京洛外に來りし時は使番を勤めて淀氷山の應接方たり此夏生國の大變を聞いて歸る時京にて送別しぬ其時集會の人は對州の多田莊藏筑の藤四郎竹村多勢子池村久衛等の人々なりき

此時余のよめる

世を深く思ひ越路のかへる山かへるかひあれ天皇の爲め

長谷川正傑略傳

長谷川正傑は越後國蒲原郡粟生津村長谷川誠の第三子なり名は正傑字は公興強庵と號す幼名は谷治鐵之進は其通稱なり人と爲り個儻不羈長身高骨面色鐵の如く眼光炬の如し好んで大刀を佩ふ幼時學を同村鈴木文堂に受く既に長して江戸に遊ひ贊を朝川善庵に執る居ること年あり善庵歿し

則ち去つて常毛の間に遊ひ帷を下し徒に教授す婦を娶つて男を生む天す
此時に當りて邊警急を告げ天下騒然たり鐵之進乃ち妻を外家に託し生徒
に謝し海内に周遊し以て天下の形勢を観察す文久癸亥京都の變に三條實
美等の七卿に従て長門に奔る三田尻の役實美の命を奉し防長の間に奔走
し忠勇隊を督す又自ら兵を募り忠憤隊と號し其將となる大樂源太郎徳田
隼人等之を佐く元治元年長門の老臣福原元侗（調カ）國司親相等に従ひ京都に抵
り會津の兵と大に戦ひ敗績す後ち四國に走る慶應三年丁卯奥羽に遊ふ是
冬十二月東國より京都に上り途中足疾に罹り床に臥し月餘を閲す
戊辰王師北征す鐵之進御親兵隊長集内式部の隊に加り之か嚮導となる其
明年己巳の春朝廷其功を賞し祿若干を賜ふ庚午の夏其師の喪に郷里に走
る既にして京都に還へり辛未の秋疾み以て歿す年五十鐵之進平生酒を嗜
み醉へは善く怒る狀貌夜叉の如し人近く能はず僕善助と云ふ者あり善く
之に事ふ或人善助に謂て曰く長谷川氏暴怒甚し子の頭日々大烟管の打撃

を被らざるなし盍そ去て他に仕へざるやと善助泣いて曰く主公嘗て僕を
死に救ふ僕の身は即ち主公の身なり僕未だ報する所あらず且夫れ隆冬自
ら衣を脱して僕に賜ひて曰く汝の寒を見るに忍ひすと世間僕を愛す寧ろ
復た主公の如きものあらんやと其人爽然として自失して去る善助は信州
伊奈郡の人亦好んで太刀を佩ひ結髪太た奇なり字して珍髪と云ふ常に鐵
之進の命を奉し東西に奔走す初め寒暑雨雪を避けず鐵之進の京都に客死
するに及びて其木主を奉して粟生津村に歸葬すと云ふ

因に

右の中竹村多勢子と云ふは女性なれとも勤王の志篤く常に勤王の志士と
交りて國事に盡瘁す善く機密を探りて常に式部等に便宜を與ふ略傳を左
に記すへし

「竹村多勢子は竹村氏の女にして信濃國伊那郡伴野村の農松尾佐次右
衛門の妻なり幼より和歌を好み老て平田篤胤の門に入り勤王の志士

と交る婦人たるを以て幕府の嫌疑を蒙ることなく善く機密を探偵するの任を完うせり京都に在るの日事露れ捕吏の至らんとするに會ふ多勢子報を聞て駭かす從容鏡に對し髪を理す人促して遁れ去らしむ答へて曰く婦女の身奔るとも及はし吏の來るを待つて自殺せんのみ唯蓬髮鬢々たらんは女子の耻なり故に將に髪を理し衣を改めんとするのみと品川彌次郎渡邊玄包來り促して長州邸に迎へ難を脱せしむ長侯毛利敬親感賞して櫻花を描金せるヒ首を賜ふ又岩倉具視の親信を得たり已にして郷に歸へり脱走の志士信州に遁れ多勢子の庇護によりて生計を營むもの多し後東京に出て明治二十七年六月十日歿す皇后宮より紅白縮緬を賜ひ其志を賞せらると云ふ

維新の頃京都に上る時鏡山を過ぎて

「鏡山心のくまも晴れにけり

立返へる世の面影を見て」

との詠あり

閑話休題

八月朔日大雨中大に進撃して賊の臺場を燒盡くし山田村に押寄せ夫より加賀高田の兵と共に進み又奥は長岡の方も同時に進み諸道一時に道聞け彌彦に兵を會して更に吉田三條に迫る又舟手は新潟松ヶ崎より進み新發田村松五泉を經津川口に攻め寄せたり賊徒支ふること能はず終に平定す尋いて奥羽地方も平定し暫時新發田に宿陣せしかやかて新潟に移る暫くして新潟に招魂場を設け戦死士の靈を祭る此所に総督の宮參らせ給ひける時御供にさむらひて

武士はかくまでも身をつくし櫛さしくむものは涙なりけり

浦山しかくこそあらめあらすともけかさぬ祖の名をはとゝめん

右終りて凱旋の途につく此度は途を信濃に取り美濃近江を經て歸洛す

途中關山を越ゆる時長男信賢御親兵となりて會津八十里越の方に向
ふときよみて遣ハす

かへりみて親な思ひそ君か爲死ぬる習の武士の道

信濃國諏訪の町離れの田の中に故相樂總藏本名小島總藏の墓ありこの人
始め江戸薩邸にありし時幕府吹上城を焼討せんと圖りしが遂けす後ち余
等の企てし江州一擧の節大原殿の手に加り尙又滋野井大原兩朝臣の建言
を持して金輪五郎と共に京に上り役目を完ふして歸へりし後今度征討使
の手につき先鋒を承りしを或事によりて死を賜ふ

君ひとりうきにはあひぬ國の爲同じ心に盡しゝものを

諏訪の海深き心をこゝろにて盡しゝかひも涙なりけり

都につきてよめる

夏衣立出し時に思ひきや生てふたゝひ歸るへしとは

あふ坂の山路は越へぬ夏衣今日をかきりと思ひ立ちしを

式部等歸洛するや左の御沙汰書を下さる



多分集内式部ト
アリシナラン

征討ニ付軍曹トシテ出張遠路跋涉日夜攻撃到ル處功ヲ奏シ今般凱至
之段其勳勞不少候此節

御駐輦之儀ニ付不取敢被慰軍勞酒肴被下候事

但春來兵事ニ付 大宮御所ニモ御内々 御憂襟被爲在征討兵士
之艱苦ヲ恤敷被 思食日夜平定ノミ御祈念之折柄今般凱旋之趣
御内聽被爲在御喜悅不斜猶又御留守中ニ付歸陣之者厚く慰勞候
様御内諭被爲在候事

十一月 行 政 官

又翌明治元年正月には官軍兵士の戦死者祭祀並に其遺族御扶助之爲式部等に對し深き御思召を以て部下戦死者の調査方御命ありしもの如く左の達しあり

破損	賞之
被爲學候時ニ	
當リ彼輩盡忠	
之志節	
御愛憐被遊	
度	
叙慮ニ付今般	
死亡之者ハ祭祀	
其妻子及ヒ現存	

之者ヲ收録御扶

助可被

仰出候條府藩

縣共

御趣意ヲ奉體

認其管轄中

無洩取調可申

出候萬一不取

調又ハ壅閉之儀

有之候テハ

朝廷之

御盛意ニ相戻候

事ニ付屹度相心

得早々姓名郷貫	更ニ被	仰出候事	正月行政官	右之通被	仰出候間相達	候事	二月軍務官
---------	-----	------	-------	------	--------	----	-------

一三 車駕東幸

明治元年九月二十日
 天皇輔相岩倉具視議定中山忠能等を從へて京都を發し東海道を經て東京に幸し給ふ車駕過ぐる所沿道の式内社に奉幣し親しく民の疾苦を問ひ沿道の孝子義婦を旌表し高齡者に物品を賜ひき十月十三日車駕東京に入らせ給ふ大總督熾仁親王鎮將三條實美等品川に奉迎す是日江戸城を以て皇居とし改めて東京城と稱せらる
 十一月熾仁親王東征の功を奏し錦旗節刀を奉還す十二月車駕西還す
 翌二年三月車駕再び東幸す
 右につき式部に對し左の御沙汰あり

此度

天皇東京へ御再幸被爲在候ニ付而者
 軍曹の者御召連に相成候旨今日陸軍

勤王家集内式部傳

將より御沙汰に付此段申入候也

尙御當日ニ者無之日限者いまた

相分不申追而可申入候

三月五日

巢内式部殿

軍務官

今般東京へ御召連ニ相成候ニ付尤御

通達申度儀有之候間明十四日巳ノ刻

御出頭有之度此段申入候也

三月十三日

巢内式部様

軍務官

取調役所

右ニ付式部の日記左の如し

然る處三月十三日軍務官より御達來十六日伏見兵隊取締東海道を可行也との處又替りて來十五日浪花より船にて相廻り可申様達し有同日兵部卿宮并ニ鳥丸宰相中將殿以下軍曹其他二條監察以上兵士等也同日夜浪華に著し同十七日大坂知府事西四辻公業朝臣に謁し色々御物語り一酌有り饒別いろく賜はる借朝臣の仰せられ候者去年九月九日東京にて主上の御前にて御酒給ひたる折しも奥羽北越平定の報知ありければ詠みて奉りたるとして示さる

二万代を祝ひて汲んみちの國ことむけしよと菊のさかつき

同廿日宮と鳥丸殿は蒸氣船にて先づ出船せられ軍曹以下御親兵は帆舞船にて出發二十一日は風なぎて我四國の島かけうすくと見ゆ其夜は紀州大崎の沖に錨を下して船を留む二十二日は朝は日よりよく追手よく吹きたるが漸く七八里はかり行しと思ふ頃より俄に天氣悪くなり雨風をつよくなりて船の中騒かしくいとまなき折柄淺瀬に乗り上げていかんとも仕

方なし漸く助船來りて深き處に漕き出しぬ折しも雨風益々つよく浪さかまきてその騒かしさいはん方なしよりて兵士等是より上陸の論起りていともくかしまし借よふく夕方に至りて大崎の港に船を止めぬ風益々つよくいつやむへしとも思はれず夫より上陸宿に入る二十三日大村藩井上三四郎外十八人はつひに上陸陸路を取る廿四日船を出す追手よし二十五日夕方志州烏羽領まと屋浦に船を止む

二十六日皆々伊勢の御神に參詣残る者は松岡高橋齋藤予外兩三人而已

卯月二日船將と示談伊勢神宮に參詣の上陸路を取ることなし二見の浦に出て神社と申へ行は參州吉田へ便船ありと云ふによりて行く風甚た烈しかりしがよふく神社に著し四日八つ後吉田に著す夫より舞坂にて止宿茲にて聞けば高松實村朝臣當地に御止宿のよし待合はせて行度は思へど是より甲州に行いて滋野井侍從殿に(甲州の知府)逢はんと思へは書を殘して先へ行きぬさて此日は日坂に止り六日江尻に止宿七日沖津より甲州

身延街道を行く南部と云へるに宿し八日甲府に著す來りて聞けば知事は此朔日東京へ出られしよし故に權知事土肥謙藏に面會大に國事を論す加藤隼人吉岡柳太郎等來會此處に二日足を留めて土肥氏と物語せり十一日は猿橋に止宿十二日吉野宿本陣重郎彦十郎に面會夫より武州駒木野落合五十馬に面會こは信州伊奈縣の大參事落合源一郎の弟なり十三日は日野十四日東京に著し直に軍務官に入る

東京滞在は其年十一月頃までなるか如し其間如何なる事をなしや審かならす記録には只井上文雄三輪田綱一郎吉岡鐵藏杯と往來せしこと杯散見すれとも別に記事なし
左の公文書あれどこれ東京滞在中のものにや將又京都に在りし時のものにや

急御談申上度儀有之候間早々只今

勤王家集内式部傳

御壹人御出可被下候以上

八月三日

御親兵

本陣

長官各中様大急

急御談之儀有之候間早々只今御出

可被下候以上

八月七日

巢内四鬼武様

大急

浦口

本陣

拜面之上御示談申上度事有之候間
明後十二日巳ノ刻頃より乍御苦勞

役所迄御出仕ニ相成候様仕度此段

申入候也

十二月十日

軍務官

巢内式部様

取調役所

一四 横井參與殺害事件

參與横井平四郎諱は時存小楠と號す肥後熊本藩士也性質聰明にして思想に富み加ふるに非凡の識見を以てす勝海舟嘗て嘆して曰く横井小南の卓識は予等梯掛けても及はずと明治元年參與に任せられ從四位下に敍す當時平四郎年齒最も高く大政官中の老先生として上下に敬重せらるる然るに式部等勤王志士の間にては當時小楠は大なる問題の人にして之を目して危険人物となし常に其言行に注意を怠らす血氣にはやる者等は動もすれば之に危害を加へんとす左の書簡の如きも其の消息の一端を語

るものなり

昨日は御光來被下忝く奉萬謝候然ハ御約束の銀山一舉(平野國臣生野の旗舉を云ふ)死亡の姓名等別紙に認め差上申候間御受取可被下候其節被托候平四郎罪狀の次第委敷ハ分り不申候得共肥後藩南木四郎ト竹中某と兩人にて切懸候得共不果志候趣にて南木四郎は大日山にて割腹致候竹中ハ藤村四郎の舍兄に御座候間藤村へ御探索被遊候ハ、大抵事情相分り可申奉存候先ハ用事而已乱筆如是御座候

二月十四日

頓首

西村 敬藏

巢内式部先生

侍史

又藤本津之介(鐵石と號す大和天誅組の首領)の如きも横井を目して我國跡を破壊する者となし之を斬らんと附け徂ひしも果さず左の狂歌を物して其友伴林六郎に與へしことあり

すくな道横井とりなす平四郎

十文字なる木にのほさはや

當時横井平四郎か五倫を革めて四倫となす云々の極端なる意見を發表せし著書として志士間に八釜敷問題たりし五部の書につき金本歌藏なる者より式部に報告し來りしもの左の如し

一 ○帝論(暫く一字を欠く)

一 天壤非説

一 天照太神私言

一 武家非録

一 公武讓言

右寫し人

京都の人 梯 信 造(死亡)

賣主

黒門出水角 上坂 新次郎

外ニ

勤王家集内式部傳

賣主

大坂心齋橋

河内屋和助

同

御堂筋北久太郎町西入

河内屋喜助

買主

京都八坂神社神主

山下貢

横井參與に關する件は以上記録によりて明かなるか如く天下志士間の大問題にして特に其五倫を革めて四倫となす云々の意見の如き志士の激怒を招きしものなり然し式部等は尙慎重の態度を取り只管事實の確證を得んことに焦慮せる折柄過激の徒突如之に危害を加へぬ時は明治二年正月五日横井平四郎退朝の途中寺町丸太町に於て凶刃に斃る下手人は元備前藩士上田立男同土屋延雄尾張人鹿島又之丞(福岡藩へ預け)十津川人前岡力雄同中井刀禰男(二人脱走)柳田直藏(討死)其外關係者上平主税大木主水谷口豹齋鹽川幸平中瑞雲齋若江薰女子にして慷慨家鼎建女子ならん(金元顯藏前木鏡之進瀧久雄海田十右衛門三宅靜馬横田次郎大熊熊藏藤木肥後守松

本巳之介子安地藏之介岡本五郎右衛門同喜代三郎田宮喜平治鎌上清記千葉徳次郎同國太郎舟橋武十等なり

右決行後政府部内に於て刺客の處分につき議論沸騰して容易に決定に至らず世論亦囂々として起り諸有志の意見を建白するもの多く彈正臺亦銳意事實の探究に努め確證を得んとす此間に於ける式部の行動及建言等以下に採録す

増山某より式部に送りし書狀

「御急書拜見仕候如仰昨日ハ態々御枉駕被成下候得共心外の御咄のみ(横井の件ならん)にて御思召の程恐縮之至に奉存候

借今日北野馬場關にもいつれも申合せ正木先生邸に參り可申との義不相變無御見捨候段者重々難有奉存候思召に隨愚輩共いつれも晝頃より出浮可申候只今程ハ兩人とも昨日の末にて出邸仕候間歸り次第具に思

召の程を申聞可有御座候將又天壤非說一件者過日より(不明)承知仕候間折角内々盡力致居申候余は後刻拜顔万々可申述候得共荒々御答迄如斯御座候不一

十六日

鳴カ

生様

増
半

右の外此件に關す往復書數通あれとも憚る所あるを以て茲に記さすトニカク當時志士間には最も八釜敷問題にして事實の有無意見の程度等につき日夜探究に努めたるものゝ如し

式部の自記左の如し

然る所同年冬東京彈正大弼備前侯の命を持し柳川藩小野小巡察急使にて備前より奸魁横井か罪狀確證を藤本津之介(鐵石)か後家之方(夫亡人)

へ求めに被遣候處此家には一物もなし依而徒らに京迄歸へる然る處予か此秋東京より歸りて後大に盡力の事を聞いて予を訪ふ依て是迄横井が奸惡を集録せる物を以て示之同人大に歡ひ度々予を訪ふ彈正臺にはケ程迄心を入れて彼等を助けんとす借直に東歸可致之處此手掛り有之か故に此約りの相分る迄京地に逗留可致と也故に前件の事を審に申示す右ハ正木昇之介か從者増田金藏を浪花にさし下し横井著述五部之書を書附に致し大坂河内屋に爲相尋候處なしと答ふ然るを一時の策に依て前廉に我見たる故に其事を主に申依て我等求めん事を以て今度態々下候處今日に至り何ぞ見せさると責む其時和介の子和三郎得と考へ入りて後夫成ば前方御覽に入候御方様ハ君にて候哉と申實は其本前方京都田中屋治平方へ爲持遣はし都合三十冊の内五冊を分て殘二十五冊室町姉小路角松田屋幸介へ賣渡す幸介は此節大坂に住居の所紀州より姫路邊へ參り居候よし故に河内屋には右の書物無之事を爲書京に歸る依

て京都田中屋治平方を調へ見候處不知を以て答ふ故に其元を探索せん事を以て浪花に下り愈々不分上は豊後鶴崎へ矢野束を遣はし可申と申約定にて浪花へ下る時に十一月四日也大坂八軒屋に著す尤も忤鬼藤太増田金藏矢野束同道大坂にて鍛冶天國壽山等同道直に和介を呼に遣はし候處夕方不成しては不歸候由夫より五日呼立右之趣申聞候處不知を以て答ふ猶明日帳面を以て旅亭に來らん事申付兩人歸る翌日親子來る依て始よりの概略を申聞け始め五部の書目録を以て有無を問ふなしと申故に策を以て前に一見せしと云ふに實は京都田中屋と松田屋兩家に賣れりと申書附を出す然るに今帳面を見れば雜の寫本四十六冊を田中治平方に賣り内十二冊を取り残り三十四冊の處三十三冊松田屋に賣りしとあり尤も辰五月也其前金藏相尋候時帳面を前に置き三十三冊の内を田中屋へ賣ると申二十五冊を松田屋へ遣はすと云ひ本數の違ひと申特に其時五部の書目録を以て之を尋ぬ然るに始はかくして後に實を告

く依て之を責む只々思ひ誤りと答ふる而已、中略、爰に岡の藩士矢野束と申人浪花肥後邸にて鶴崎毛利イタルの子息タマスに面會の節我親天壤非説を持てりと云ふ故に同夜矢野を豊後鶴崎毛利の邸に遣はしぬ尙西國の事情を探索せん事を託して立たしむ猶彈臺油川に談じて十兩を借用外に廿五兩を添へ卅五兩爲持同夜出船せしむ同六日大坂府内佐久間守衛介喜多田三郎箕田貢一郎林〇(不明)寄りて一酌すこれ等皆黒谷隊より出たる者也同七日知府事西四辻殿に拜顔夕暮八軒屋より乗船京に歸へる其後古賀大巡察肥後を探索して天道革命論を得たり此書を以て小野小巡察は火急東歸せり

日々寒氣強く御座候處益々御勇健

御起居奉賀候昨夕ハ折角御尋被下

候處匆忙之折柄ニテ失敬打過恐縮

之至也其節御談之事件ニ付河内屋

和助呼出し勘問に及候處偏ニ相祕し居事情明亮不仕候間即時忤和三郎呼出し猶又篤と勘問に及候積就テハ昨日拜見仕候本屋之文通書等確證之書類今一應拜見仕度恐入候得共此者へ向ケ御遣はし可被下候様奉願候他者拜眉草々頓首

十一月六日

巢内 鴨カ 生様

急用

般來巡察屬

貴翰拜見仕候然者岩崎等すてニ只今出立仕候處ニ御座候扱て諸先生御厚志之御取調ニて天壤非說御探

索出來候由鋤き初いづれもの悦無此上候且また過日拜借之書類御返申上候煩御使赤面之至奉存候書余者拜顔之節可申上候

早々如此御座候

十月廿六日

巢

鴨カ

生様

増山

半

其後は打絶御疎情相過如何共不知所謝追々寒冷之候益御多祥奉欣喜候過日於東京拜顔後陋儀も歸京後は彈正臺出仕奉命碌々起居罷在候間乍失敬御安意被下度候扱亦陰ニ承候處於先生者横井之書籍御手懸

り被爲在候哉に傳承右者方今(不明)
折角確證探查之爲メ於僕も夙夜焦
慮罷在候折柄何卒聊ニ而も御手懸
り御座候ハ、爲御聞被下度夫共ニ
拜顔ならでは御教示難相成候ハ、
早速參郎可仕多忙中以書中不願多
罪如此御座候草々頓首

廿九日

集内式部様

御直披

新井讀之助

建言(抄出)

謹按スルニ刑罰ハ

列聖之同シク軫念シ玉ヒシ所青史ニ昭々タリ今復何ソ贅センヤ今ヤ

御復古ノ始政ニ當リ天下人心ノ服否最モ茲ニアリ今年正月五日京師寺町
ノ事ハ維新以來ノ事旬日ヲ不出シテ四方ニ喧傳セリ彼刺客六名ノ内三名
ノ罪科一人ハ斃レ二人ハ脱網三人ハ就縛今日ニ至リ群議異同未已ト窃ニ
惟ルニ此御處分ノ當否ハ實ニ
聖德ニ關係ス然ルヲ某等緘默セハ平生忠愛ノ誠ニ負ク故ニ冒萬死論列如
左

中略

彼刺客等素ヨリ不學無知ノ者ナレバ
朝廷ヲ犯スノ罪タルヲ忘レ報國ノ事ハ此姦ヲ除キ
朝廷ヲ蠱惑セサラシムルノ外ナシト一途ニ心得シヨリ右ノ舉動ニ及ヒシ
ト見ヘタリ其志ハ憐ムヘシト雖モ豈罪ナシトセンヤ某等虚心以テ之ヲ斷
センニ六名中五名ノ者ハ決行ノ儘直ニ刑官ニ就キ其處分ヲ待ツノ心ナク
潛匿シテ朝家ノ紛擾ヲ致シ剩ヘ許多ノ連坐ヲ生セシハ卑怯ナリ且殺身報

國ノ士道ニ背ク又他三名ノ者ノ如キハ數日ニシテ視然就縛是レ罪ノ大ナルモノナリ然ルニ下獄ノ後一名ノモノ自ラ首謀ノ實ヲ吐キ嚴刑ニ就カント請ヒシヨシ是レ尙士氣ノ在ルアリヤ、稱スルニ足ル故ニ餘二名ノ捕獲ヲ待チ一同割腹ヲ命セラル、コト至當ナラン雖然横井徹庸中在廷ノ人其姦ヲ不辨蘇洵ノ眼力ニ乏シカリシハ

朝家ノ御爲メ不幸無此上濫舉ノ責恐ラクハ歸スル所アラン且維新以來殊ニ寛大至仁ノ

叡慮ニヨリテ叛人ト云フトモ死スル者ナシ況ンヤ忠愛ノ赤子ナレハ、中略、、、、彼三名ノ者死一等テ滅シテ永ク筑藩ニ幽蟄ヲ命セラルヘク餘二名ノ者既ニ死セハ已ムモシ偷生他日被捕ンカマタ何レノ藩ニカ永蟄ヲ命セラルヘシ彼徒ニアリテハ屠腹永蟄何ソ撰ハン但

朝廷ノ至仁至公ヲ天下ニ明示セラレンコト今日在省ノ諸君子豈之ヲ勗メサルヘケンヤ某等不勝懇願切望之至 恐々謹白

巢内式部

吉見禎介

和田肇

三輪田綱一郎

伊藤良馬

丸山作樂

中川潜叟

疋田源二郎等

其後ノ消息

過日建言伺ひ出之所歎願の情委細ニ廟堂ニ上達貫徹致候由待詔院照幡氏より被申聞候事

尙又十九日照幡氏より横井斬姦之三名

朝廷思召被爲在候ニ付死罪之儀御延引被仰出候旨御達有之候事

爾後の経過につき記録なきを以て其結末の如何を知るを得ざるを遺憾とす

一五 興覺寺

式部か明治三年五月圖らすも罪を得て郷國に禁錮せらるゝに至りし因由を尋ぬるに時は明治二年十二月二十日諸書には多く九月四日とあれと今式部の日記に従ふ兵部大輔大村益次郎京都に於て暗殺せらる横井參與横死後未だ一年ならずして再び此凶變あり特に大村大輔は長州出身の大立物として當時政府部内に於て最も尊重せられし人なれば世人の驚きは勿論長州方の人々に取りては宛も親を失へる如く悲痛憤慨遣る方なき有様なりき下手人は六名にして何れも直に縛に就き斷獄の上各梟首せられぬ

然るに右下手人伊藤源助金輪五郎五十嵐伊織等六名の者は皆維新の志士にして嘗て式部の部下又は友人として共に國事に奔走せし人々なりしかば式部は彼等か梟首せられて幾日子を経過し無慘にも風雨に曝され鳥群の食餌となるを憐み既に處刑の後なれば最早死屍には罪なかるへし昔日の誼みに彼等を供養し遣らんと思ひ立ち兵部省に向つて公然其首級埋葬方を出願せり

然るに前記の如く長州方の人々は痛歎已まさる折柄とて以ての外なりと憤り翌二月天地容る可らざる大賊に對し其首級埋葬方願ひ出でたる儀不届の至り堅く吟味の次第有之候條謹慎申付候とて先づ大目眼を喰はして之に謹慎を嚴命し爾後連類の嫌疑を以て頻りに事實の探究を爲したるも何等の形跡なかりしを以て同五月に至り

右連賊の首級埋葬方出願せし不心得の廉を以て職を免し歸籍禁錮を命せられぬ式部は甚た以て心外となしたれとも茲に至りては如何んともせん

すべなく六月歸國暫時親戚に身を寄せしも翌四年の春より八多浪なる古元山下の一精舍興覺寺と云ふに入り一室に籠居して深く謹慎しぬ卷首一老翁の不可思議の人物として説きしものは即ち當時の彼を云へるなり又政府の命によりて彼を預りし大洲藩は此時頃よりして藩内百姓一揆の乱起り爲めに士民其堵に安んせざる有様にて竟に山本大參事割腹の騒動となり式部等に心を寄する隙なく其手當もそこなる中翌五年十月陽曆十一月秋雨蕭々として晚鶉枯枝に鳴くの夕筆を手にし机に倚りかゝりしまゝ突如として逝けり

嗚呼彼にしてもし尙數年の命を保たんか必ず青天白日の身となりて再び恩命に接し相當の地位を得しのみならず勤王の功に對しやかて恩賞にも浴しつらん不幸短命にして罪なきに罪に死せしは歎きても餘りありと謂ふ可し式部の罪なきは明なる事實ながら尙念の爲め一言辨する所あら

抑も大村兵部大輔の衆怨を買ひしは必竟彼が兵制改革を企てしに由る當時大村益次郎謂へらく今や奥羽の戦乱漸く局を結べるも列藩中戦勝の功を待み後來或は政府の制令に違反する者あらん若かず先づ其兵權を朝廷に收め以て彼等の實力を減殺せんにはと仍て藩兵を解散し別に制度を改め総へて佛式によりて訓練し依て以て統一的軍隊を組織せんと企てぬ是れ蓋し極めて卓見にして且適當の意見なりしかとも當時維新の創業に際し時少しく早かりしかは大村は列藩兵衆怨の府となり遂に變に逢ひしか之を式部の位地より見るに元來彼は何れの藩士にもあらず又何れの藩にも關係なし隨て藩兵の存廢の如き何等の痛癢なきのみならず兵權を中央に收めて朝廷の權力を強固ならしむるは其最も喜ぶ處特に彼は元來の長州黨にして長州に同情すること由來久し大村に對しては好意こそ有ちたれ何等怨根を挟むべき事情なく歴史なし要するに古の出願は單に舊友等の刑餘の亡き骸を惘然に思ひし友情の發露のみ

法律思想の發達せる今日の御代なりせば之に由りて何等咎を獲ることなき筈なれとも時可ならず彼は實に之か爲めに嘗て君國に盡し、十年の千辛萬苦を水泡に歸せし結果となり世人は勿論親戚故舊さへも彼を目して恐るへき罪人となし之に近くを憚りしのみならず彼か事は口にするさへ恐れたりと云ふに至ては當時の時勢已むを得すとは云ひなから真に心外千萬なりとす

斯の如くにして星移り物換り烏兔匆々茲に五十年飯か盡忠の事蹟は全く地下に埋没し去りて殆んど口碑にさへも傳はらず八多浪丘上一片の墓石は徒らに風餐雨蝕して弔ふ人もなく只傍の老松のみ長へに墓邊を護り秋夜人定りて諤々として獨り英雄未死の魂と語るあるのみ

本會役員

副總裁	關員	岩崎英重
會長	赤司鷹一郎	早川純三郎
幹事長	關員	

顧問

公爵 松方正義	子爵 金子堅太郎	公爵 德川家達
公爵 九條道實	侯爵 德川義親	

評議員

赤司鷹一郎	池邊義象	子爵 小笠原長生
男爵 大倉喜八郎	大谷嘉兵衛	加藤正義
文學博士 三上參次	子爵 澁澤榮一	武岡豐太
德富猪一郎	文學博士 萩野由之	原六郎

會員名簿

(五十音順)大正十一年九月現在

宮内省	赤司鷹一郎	赤星鐵馬	秋田圖書館
李王職	荒井泰治	有馬賴寧	伯爵井伊直忠
	池田謙三	池田侯爵家	侯爵池田仲博
	池邊義象	井坂孝	維新史料編纂會
法學博士	石渡敏一	候爵井上勝之助	井上準之助
	井上政寬	井野邊茂雄	今村繁三
男爵	岩崎小彌太	男爵岩崎久彌	岩崎英重
	岩瀬文庫	井原豐作	工學博士植木平之允
法學博士	上杉慎吉	上野勝啓	占部百太郎
	大岡破挫魔	男爵大倉喜八郎	大阪天滿宮社務所
	大阪府立圖書館	大谷嘉兵衛	男爵大森鍾一
子爵	小笠原長生	男爵尾崎洵盛	小田柿捨次郎

小野哲郎	各務幸一郎	香川縣教育會
學習院	華族會館	勝田孫彌
梶原仲次	川上直之助	子爵金子堅太郎
金光鑑太郎	河野巖男	川口清
川崎八右衛門	河野巖男	河野正義
菊池長四郎	貴族院	子爵吉川元光
侯爵木戶幸一	木村清四郎	京都帝國大學圖書館
京都帝國大學文學部	京都府立圖書館	清海復三郎
桐島像一	公爵九條道實	子爵久世廣英
久原房之助	熊本縣立圖書館	侯爵黑田長成
高知縣立圖書館	神戸高等商業學校	神戸市立圖書館
國學院大學	小林勝四郎	文學博士小牧家
雜賀博愛	侯爵西郷從德	伯爵酒井忠克
醫學博士	佐藤範雄	侯爵三條實憲
佐々木政吉	子爵澁澤榮一	公爵島津忠承
芝川又右衛門	子爵澁澤榮一	公爵島津忠承
公爵島津忠重	男爵島津久家	男爵島村速雄
神宮文庫	神宮奉齋會	新庄金生

工學博士 下村育英財團 杉浦平六 杉山四五郎

第三高等學校 須田利信 男爵 住友吉左衛門 第一高等學校

高岡圖書館 高岡圖書館 第四高等學校 高崎圖書館 第六高等學校

武岡豐太 武田秀雄 高頭仁兵衛

竹村與右衛門 辰澤延次郎 伯爵 伊達邦宗

侯爵 伊達宗陳 伯爵 田中留吉

田邊密藏 田保橋潔 田村市郎

伯爵 中央大學圖書館 男爵 都築馨六 帝國圖書館

伯爵 寺內壽一 東京商科大學 東京商業會議所

東京帝國大學圖書館 東京帝國大學文學部史料編纂掛 東京日日新聞社圖書室

東北帝國大學圖書館 德富猪一郎 伯爵 德川達道

侯爵 德川義親 長崎圖書館 男爵 長松篤兼

長岡市立互尊文庫 長崎圖書館 男爵 中山正善

中川小十郎 男爵 中島久萬吉 成田圖書館

奈良女子高等師範學校 成瀬正忝 男爵 南部甕男

南葵文庫 南波禮吉 男爵 南部甕男

文學博士 永富雄吉 西脇濟三郎 野崎廣太

萩野由之 博文館編輯部 侯爵 蜂須賀正詔

早川家 早川純三郎 原六郎

日高榮三郎 廣島高等師範學校 福岡縣立圖書館

福原八郎 男爵 藤田平太郎 藤田政次郎

藤田政輔 藤山雷太 男爵 古河虎之助

北海道拓殖銀行 北海道帝國大學圖書館 侯爵 細川護立

伯爵 堀田正恒 本間光彌 前川一郎

侯爵 前田利為 伯爵 松浦厚 公爵 松方正義

子爵 松平直亮 子爵 松平定晴 松本高等學校

松山高等學校 間野春治 真山青果

法學博士 三浦新七 文學博士 三上參次 男爵 三井八郎右衛門

三井同族會 法學博士 水町袈裟六 南義二郎

南滿州鐵道株式會社圖書館 宮本仲 武藤山治

公爵 毛利元昭 本山彦一 桃井可雄

文部省 安田善雄 安田善三郎

公爵 山縣伊三郎 山形高等學校 山岸弼次郎

山口吉郎兵衛	山口縣立圖書館	山口恒太郎
山崎信興	山下龜三郎	山之内一次
侯爵 山內豐景	橫山章	吉川馨
米澤元健	陸軍省	早稻田大學圖書館
工學博士 渡邊嘉一	渡邊勝三郎	伯爵 渡邊家
子爵 渡邊千冬		

右以印刷代謄寫各藏一本

大正十一年十一月二十日印刷
 大正十一年十一月廿五日發行

巢內信善遺稿全
 (非賣品)

編輯兼發行者

早川純三郎

東京市四谷區舟町二十一番地
 日本史籍協會代表者

印刷者

高橋赤次郎

東京市京橋區新榮町四丁目三番地

印刷所

高橋活版所

東京市京橋區新榮町四丁目三番地

發行所

日本史籍協會

東京市四谷區舟町二十一番地



316
164

終